

I

退職世代をまきこむために
退職世代の心もちを大切に



1 なぜ「退職世代の社会参加推進」にかかわる研究を行ったのか？

世の中では一時、いわゆる団塊世代が定年退職する時期が2007年を中心に集中しそうだ、ということから、その世代の人たちの定年後のすごしかた・暮らしに大きな注目が集まりました。

その注目の仕方には、立場によっていろいろなものがありますが、ひとつは、会社勤めをしてきた男性が、あまりに会社人間・仕事人間で、地域のつながりもなく、趣味や生きがいに乏しいのではないか、という懸念と、それによって、退職後、毎日の暮らしかたに迷いや不安をかかえながら無為な日々をすごしてしまう人が多く発生するのではないか、という憂慮でしょう。同時に、高齢者数が急激に増加する時が確実にくることから、介護や年金財源の問題としてもとりあげられてきています。

一方で、退職世代を『豊かな消費者』としてもてはやし、一クラス上の旅行やレジャー、あるいは住宅購入や投資へのお誘いなどにかかわるものも非常に多く目にします。

上記のような憂慮をポジティブに発展させているのが、退職世代の『人財』としての意味に着目し、社会的な活動や地域活動の担い手として、「金銭を目的としない社会における働き方」に関心をもってもらう、というものです。

行政、社会福祉協議会、NPOなどが、さかんに『地域デビュー講座』や『お父さんお帰りをささいパーティー』などを開催するようになったのは、そのひとつの表れといえましょう。一方、行政や社協としては、社会における課題が山積し、制度だけでは人びとの暮らしをよくすることがますます難しくなってきた昨今、せっかくの人材にもっと地域で活躍してほしい、ボランティア・市民活動の担い手として地域をよりよくするために貢献してほしいという、切実な思いをもって、そのような企画を実施してきているといえます。

しかしながら、そのような講座やパーティーへの参加者数は、必ずしも多いとはいえず、また、そのような講座やパーティーに参加した人たちが積極的に地域活動・社会活動に参加するようになったか、ということ必ずしもそうではなさそうです。

そのことは、次の根源的な問いに結びつきます。

退職世代はボランティア・市民活動をしたいと思っているのか？

退職世代がボランティア・市民活動に参加するよう推進する必要があるのか？

退職世代らがボランティア・市民活動に積極的に参加できる環境とはどのようなものか？

そして、最初の二つの問いへの応答は

YES でもあり NO でもある と、いささか曖昧ながら、両面性をもったものになりそうです。

この研究委員会では、最初の2つの問いについて、丁寧に状況把握するとともに、3つめの問いへの答になりえるいくつかの提案を作成するため、各地にて、すでに退職世代の男性が多くかかわっている活動、あるいは、そのような活動を推進しようとしている団体、さらには、より広い意味で、人びとの社会参加の拠点や仕掛けを提供している組織などにヒアリングを行うとともに、実際に活動に参加している人びとの意見なども聞いてきました。

本章では、以下、それらのヒアリングをもとに、現状と課題を分析し、第Ⅲ章で展開するプログラム案の提案の基礎としていきます。

2 退職世代はどんな人？ 時代背景／文化背景を知る

会社人間から地域人間へ 退職世代の人たちの社会的背景のイメージをつかむ

いわゆる団塊世代といわれる人たち前後の年齢層にある人たちの多くは、職種や勤務形態はともあれ、雇用される人、つまりサラリーマンとして働いてきました。高度成長期からその後バブルがはじけるまで「モーレツ社員」とか「会社人間」などという言葉に表されるように、職場を第一に、そしてバブルがはじけるや、一転して、リストラの対象として、過酷な競争社会のなかで、走り続けてきました。また、核家族化が飛躍的にすすみ、親元から離れて都市部で働いていた若い世代が結婚してそのまま都市部に定住し、郊外の団地や戸建てに親子だけで住むことがひとつのステータスになった時代の延長線上にいる人たちでもあります。家族の幸せのため、マイホームの夢のために、遠距離通勤に耐え、残業も多くこなしてきました。週末は、子どもが小さいうちは、地域のつながりより家族との時間を優先させ、郊外の人たちは車で遠出して遊ぶ、といった生活パターンがみられましたが、だんだん、会社のつきあいであけをけることも増え、子どもが思春期になると、父親の家庭での存在感は往々にして薄くなってしまいます。母親は子どもをとおして地域とのつながりをかろうじてつくることはいえ、父親の場合は、さらに転勤／単身赴任などの要素も加わり、地域につながりをもつのは難しいままに定年を迎えています。会社のため、仕事のため、家族のために、とひたすら他者のためにエネルギーをそそいで生きてきた世代であるがゆえに、逆に地域人としての自立が損なわれてしまった人たちであるということができます。ただし、地域人としての自立に関していうならば、この世代以降、みな状況は同じか、あるいは、もっと地域とのつながりが薄いかもしれません。

そのような、日本の高度成長期を根底から支え、激動の時代を駆け抜けてきた退職世代の人たちが、今度は「会社」というコミュニティから「地域」というコミュニティにどう生活の軸をシフトさせ、どのようにして地域の人として生き生きと暮らすことができるようになるか、が着目点であるわけです。

文化面からの理解

いわゆる団塊の世代の人たちがすごしてきた時代背景を少しでも理解できるよう、巻末にいくつか時代を象徴するキーワードをひろった表を添付しました。その世代の人たちは、経済を支えてきたとともに、60年代、70年代文化の先端を走ってきた人たちでもあります。アイビールックをまとい、フォークブーム、ビートルズ旋風、ギターブームの中核にあり、アングラ、サイケ、カウンターカルチャー、ジーンズなども団塊の青春を象徴する事象です。学生運動を真只中で経験しますが、それ以前は受験戦争などの真只中にもいました。よく、団塊の世代の人たちは、「議論好き」「理屈っぽい」「自己主張が強い」「自分が納得しないと動かない」といわれますが、それは、裏を返せば、エネルギーや好奇心にあふれ、信じたことにはまっすぐ進んでいく純粋さももちあわせていることになります。

そういった時代背景や、よくみられる行動パターンなどをある程度理解しておくことは、退職世代と

ともになにかを創り出そうというときにきっと役にたつはずです。

3 退職世代の気持ちは“ふくざつ”

自分のこの先の生き方について 明確なビジョンがある人となない人

現在、地域活動やボランティア・市民活動にかかわっている退職世代前後の人たちが現在の姿になるまでには、いろいろな経緯／経路をたどってきています。

たいがいの退職世代の人たちは、退職以前から、それなりに退職後の暮らしをどうしたらいいのだろうか、という漠然とした不安を抱えています。しかしながら、意識はありながらも、実際に具体的な行動をおこさないまま定年を迎えてしまう場合が非常に多いようです。また、会社などが設定するライフプランニング講座などは受けたけれども、地域での暮らしそのものまでイメージできないままに退職してしまった、という人たちもいます。あえて、定年を迎えるまでは考えないようにしてきた人もいますし、あるいは退職前から着々とさまざまな情報を集めて計画をたててきた人ももちろんいます。準備を進めてきた人たちは、退職の段階で、およそ、自分たちが今後どのように暮らしたいのか、どのように老後の生活を組み立てていくのか、一定のビジョンをもつことができるので、退職後に迷わずに次の段階に進むことができるようです。

ボランティア・市民活動についての意識となると、退職世代にとって、ボランティア・市民活動はちょっと敷居が高い、あるいはあまり関係ないものであって、一般的な意味での関心はあるにしても、ライフプランニングの選択肢の一つとしては十分に意識化されていない傾向もみられます。

いずれにしても退職してしまえば、現実と直面することになり、なんらかの行動を起すことになるわけですが、行動を起す時期も、方向性も人によってさまざまです。



活動にかかわるようになったタイミング

- 退職前から準備して、退職前から活動にかかわっていた
- 退職前から意識をもって退職後の暮らしの準備にかかり、退職直後より社会的な活動にかかわった
- 退職前から考えてはいたが、実際に活動にかかわるようになったのは、退職後しばらくしてから
- 退職前は何も考えていなかったが、退職直後から積極的に調べものをして、すぐに活動にかかわるようになった
- 退職前は何も考えず、退職後も他のことに気をとられていたが、時間がたってから、必要性を感じてかかわるようになった

まだ働きたい？

退職世代の多くは、退職後も何らかの形で働き続けたい、という意識が非常に強いようです。その背景には、まだまだ、身体も頭も十分に機能するのだから、社会的な居場所／能力の発揮場所としての職

場を確保したい、という意識がひとつ。またさらに高齢になった時の介護費用や医療費などをみすえて、先々でできるだけ経済的な不安に陥らないよう、収入を確保しておきたい、という意識がひとつ。特に、年金が支給されるまでは、これまでどおりでなくても「なんらかの収入は必要」と考える人たちが多くいます。また、働かなくては生活が維持できないことも多いと思われます。

「退職世代は裕福」は幻想？ ボランティア・市民活動の暮らしにおける意味

世間では、団塊世代が退職したら、すぐに裕福な消費者として世の中で自由を謳歌し、今までできなかったレジャーや趣味などに取り組んだり、住宅リフォームや別荘暮らしを考えたりする、というようなイメージが繰り返し報道され、実際に、旅行会社やゴルフ場、物販会社などによる、消費者としての団塊世代への攻勢も多く目にします。けれども、現実には、贅沢な旅行やグルメなどにははいることができる人たちは、退職世代のうち、どれだけいるのでしょうか？

たとえ、退職直後は、これまでの自分の働きへのご褒美として、自由時間を謳歌したい、と、気ままにのんびりしたり、夫婦旅行をしたり、ゴルフ三昧をしたり、などなどを楽しんだとしても、いずれは、それだけでは生きていく支えにはならないことに気づくこととなります。「のんびりだけではつまらない」と気づく最初の時が、だいたい「退職して3か月後」という人がいます。それから「さて、これから自分はこの先、どうやって生きていくのか」と真剣に考え始める、というのです。

実際、退職後さらに20年ぐらいの人生があるであろう、と仮定すると、贅沢に遊んでばかりいられる余裕がある人たちなどほとんどいない、といっても過言ではないでしょう。誰もがたっぷりの退職金とともに企業から退職するわけではないことを、まずは、きっちり意識しなおす必要があるでしょう。

その仮定に立ったときに、人が人として、地域において生き生きと暮らすための糧のひとつの選択肢として、地域活動／ボランティア・市民活動をどう視野にいれていってもらおうか？ それがこの研究の目的でもあり、これまで退職世代をターゲットとしてプログラムを企画運営してきた人たちの目的であることをあらためて、認識しておきたいと思います。

必ずしも ボランティア・市民活動である必要はない？

とはいえ、退職世代の生き方について、なにがあってもボランティア・市民活動にかかわってもらわなければならない、というわけではないはずで、まずボランティア・市民活動ありき、のメンタリティも一度捨ててからあらためて考えてみましょう。

退職世代にとって、仕事への意識が強いならば、再就職したり、シルバー人材センターなどに登録して、テンポラリーな仕事をするなど、これまでとは違う働き方を模索することもあるでしょうし、生活にある程度余裕がある人たちが、趣味活動に生きがいとつながりをもつこともありえるでしょう。また、家族や友人とのかかわりで充実した暮らしをつくることのできる人もいるでしょう。一方で、退職を契機に、自分の親の介護に携わることになる人たちもいることでしょう。

ただ、ひとつ明らかなことは、人は社会的存在であり、一人では生きていけないことです。なんらかの社会的つながりをおのずと必要とするわけで、その確保手段のひとつの選択肢が、地域活動なりボランティア・市民活動であるのだらうと思います。

一方で、退職世代前後の人たちの多くは、社会に貢献することの大切さをかなり意識しているようにもみうけられます。「ボランティア・市民活動」という言葉は使わなくても、社会的に意味のあること、価値のあることにかかわりたい、という気持ちがあるようなのです。もっと単純化すると「自らの有用感をもちたい」「自分の行動に感謝されたい」「自分の技術や知識を自慢したい／ほめられたい」と

脳内イメージ 退職前後のもやもや編

困惑する本人たちのつぶやき



- ① 年金がもらえるまではもうすこし働かないと、これからの暮らしがこころもとないな～。でも、前みたいに、仕事だけの生活もいやだな～。
- ② 仕事に行かなくなると、どうやって1日をすごしたらいいのかな～？ 喫茶店や図書館で閑そうなおじさんたちをたくさんみるけど、みんな元気がないのが気になるね。僕はそうはなりたくないんだけど…。
- ③ 「退職したら趣味に生きなさい」なんていわれても、仕事仕事で趣味らしいものなんかないよ。
- ④ 仕事やめたら会社の友だちとも連絡を取らなくなってしまったな～。最近家族以外と口をきいていないような気がするけど…。このままじゃあつというまに老け込んじゃいそうだ。
- ⑤ 仕事やめてゴルフや旅行三昧と思っただけど、毎日・毎日そんなことばかりしていてもつまらないな～。なにかもっと生きがいになることをしたいな～。
- ⑥ 地域のお隣さんの名前も知らないし、近所に公園があるのかも知らないな～。もっと地域に根をおろした生活をしたいな～。
- ⑦ ただで聴ける講演会とかイベントってどこで情報をみつけたらいいんだろう？ 通勤しないと駅にも行かないからね。

いった願望も見え隠れします。

そのような社会貢献意識を、ちょっとした「思いやり」「おてつだい」「親切」「おすそわけ」「おたがいさま」「おせっかい」といった言葉に置き換えてみれば、彼らにとって少々敷居が高くみえるかもしれない地域活動やボランティア・市民活動も、遠いものではなくなるかもしれません。

4 きっかけはいろいろ お誘いの力

仕掛けはタイミングとメニュー

退職世代が地域活動やボランティア・市民活動にかかわるようになるか否か、のひとつの鍵は、退職世代の人たちの「気持ちがそのようなことに向いたときにぴったりの働きかけができるか？」「意に染むメニューがそのとき目の前にあるか」あるいは「期待感をもたせることができるか？」でしょう。

まさしく、一期一会に近いものがありますが、そうそうかんたんに、タイミングがあうとはかぎりませんから、情報を提供したり、働きかけを行う側は、忍耐強く、気長にあきらめずに発信し続けたり、場をつくり続けることが大切になります。こつこつ、日々の積み重ねを行っていくうちにいずれタイミングがあうときがくるはずです。

ただし、気をつけなければいけないのは、その世代の人たちに参加してもらいたいがゆえに、熱意ありあまって無理強いしたり強制したりするのはご法度であることです。

また「すべての人に」とは考えないことも大切なことのように思われます。むしろ、なんとなく「このままではまずいのではないか」と不安をもっている人、わずかでも社会的な活動に関心を示した人をとりこぼさないことを鉄則とし、なるべく間口を広く、メニューをいろいろ用意することによって、入り口をくぐってくる人を増やしていくことを考えることが得策ではないかと思われます。

人に誘われることがいちばん

現在、すでに活動にかかわっている人たちのお話をきいてみると、活動にかかわるようになったきっかけは、実に人それぞれで、その人の性格、家族状況、興味の対象、おかれている環境、タイミング、など、いろいろな要素によって影響を受けており、これといった決め手はない、という現実があります。しかしながら、きっかけはさまざまであっても、自らの意思の有無にかかわらず、人づての力の大きさはダントツであったことはまぎれもない事実です。

これまでお話をうかがってきた方たちの入り口を類型化してみると、以下のようになります。

1) 人が介在 夫婦円満の副次効果も？

「積極的に誘われた」「ひっぱっていかれた」から「会話で話題にのぼった」「ちらしをもらった」ぐらいの軽いおさそいまで、人が介在する度合いはいろいろですが、ちょっとシャイな退職世代の男性には「人からのお誘い」「知人がすでに活動している」などが最も強力なきっかけであり、入り口になっています。知り合いや先輩に誘われて「様子を見に行くだけのつもりだったのに、すっかり楽しくてはまってしまった」という台詞をたくさん聞きました。

特に、妻の働きかけや妻のつぶやきの効力は大的ようです。すでに福祉施設のボランティアをなさっている妻が「柵をなおしてくれる人探しているけど、行ってみない？」と声をかけたり、妻から「社協

でメタボ対策講座をやるらしいわよ」とちらしを渡されたりしたことをきっかけに、活動にかかわるようになった退職世代の男性たちにも実にたくさん出会いました。そういう意味では、妻たちの理解を得て、彼女たちが媒介するような仕掛けをもっと考えてみることも一考の余地があります。イベントなどの参加条件で「夫婦同伴のこと」としているプログラムもあちらこちらでみかけました。実際「ボランティア・市民活動にかかわったから、夫婦の会話が促進されて、家庭内円満になった」という副次効果も聞こえてきました。

ただし、必ずしも、夫婦同じ活動に参加するのが望ましいわけではなく、イベントなどの際とはかく、日常的な活動は、それぞれの関心・興味にあわせて、別のグループや別の種類の活動のほうがよい場合が多いようです。

2) 媒体や場の効果も 市町村の『広報紙』が人気？

人づてでなく、文字情報からなにかしらのきっかけを得ようとするとき、退職世代の方たちは、新聞やその折込に入っている市町村などの広報紙（戸別配布の地域もあるようですが）をくまなく読まれるようです。そのような広報紙に載っていた講座に参加して、ボランティア活動にはまった人も多々おられるようです。この世代の人たちは、新聞や折込の広報紙やお知らせなどを情報源としてよく使っています。このことについては、次の中間支援の章でさらにふれます。

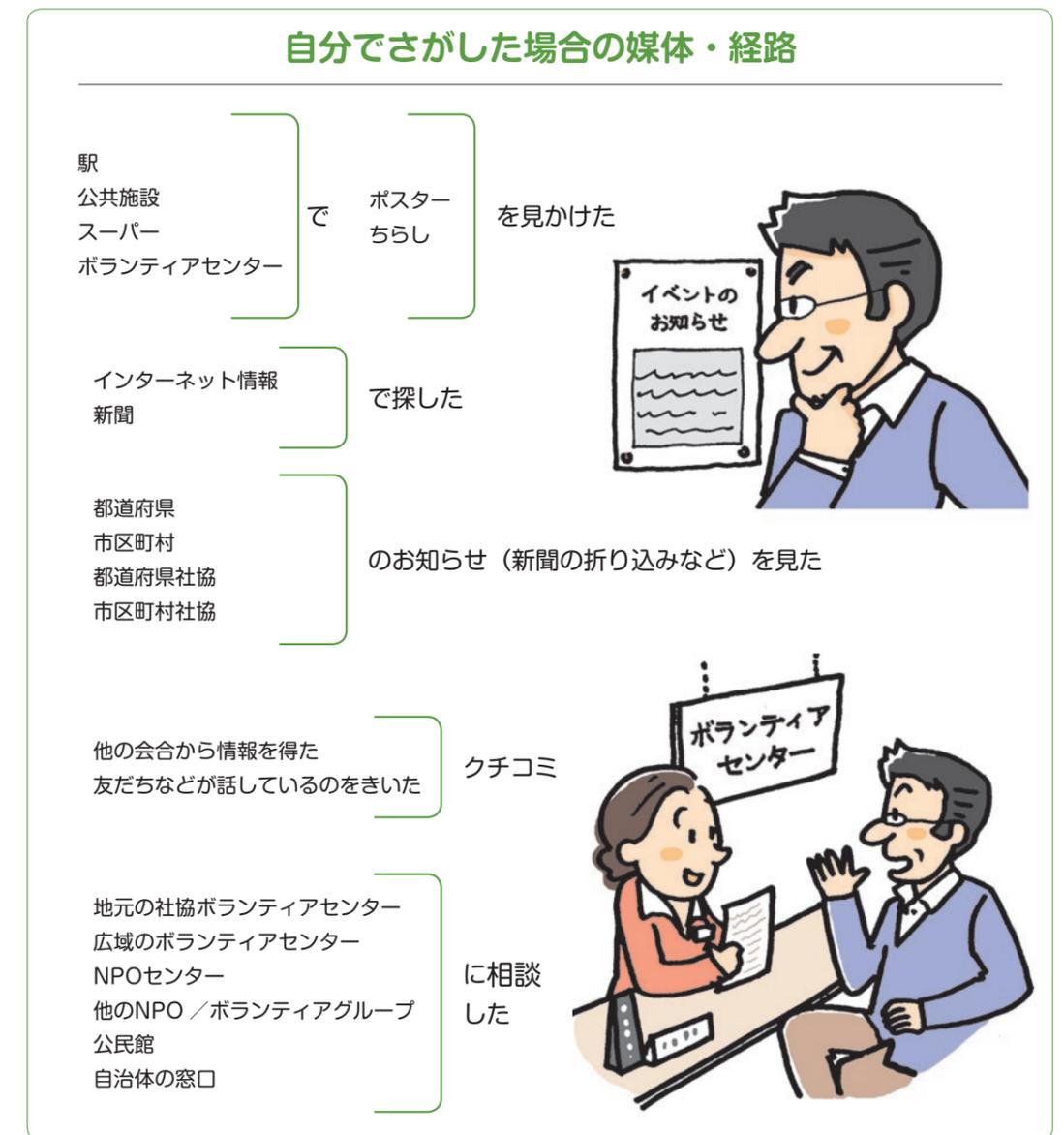


公民館など、公共の施設に出向いて、地域でどのようなことに関心がもっているのか、様子見をした方にも何人も出会いました。

3) きっかけとなる活動や講座、コーディネーターなどの影響力

ボランティア入門講座修了生や、セミナーなどの参加者で、元気のいい人、意欲の高かった人、関心の深かった人などを、社協など、講座やセミナーの仕掛け人やコーディネーターなどがしっかり観察して、そのような人たちを促してグループ形成に導く、というのもボランティア講座ではよくある話ですが、この手法の効果は退職世代についても例外ではありません。大切なのは、場と人とグループダイナミクスを読むコーディネーターの側の力量です。メンバーの思い、力量、性格、行動パターンなどをよく観察してうまくつなげられると、活動グループとして大化けする事例を、ヒアリングでも目の当たりしてきました。

まったく何もわからないままに、社協のボランティア・市民活動センターに相談に行った際、コー



脳内イメージ おまけ

妻のつぶやき



- ① これまで会社と家の往復だけ。趣味もないあなたと楽しい老後なんてどうやって考えたらいいのかしら…？
- ② うちの主人ったら、なんにも家のことやってくれないの。といて、外で何かしているわけでもなく、ごろごろしているだけ。「普段は真空パックに入れて押し入れにしまっておいて、必要なときだけとりだす」なんてできないかしらね～。
- ③ うちの主人は、電気仕事やら大工仕事やらが大好きで、それさえやっていたら幸せみたい。でも、家は狭いし、これ以上直すところもないから、どこかでやらせてもらえないかしら？
- ④ うちの主人みたいに、無趣味で引っ込み思案な男性が何かしらやりがいのあることを見つける方法がないかしら？
- ⑤ 勤めていた時から、主人に地域の寄り合いに参加してきてもらってよかったです。退職後、すぐに自治会のお手伝いさせてもらえて、何だか頑張ってる感じがしますよ。
- ⑥ 退職前に2人で「夫婦deボランティア講座」に行っておいてよかったわ。参加しているのは別の活動だけれど、共通の話題ができてなんとか家で会話ができるのよ。
- ⑦ 私のやってるボランティアグループで男手が必要な時に、主人に頼んで手伝ってもらったら、それからボランティアにハマっちゃって、今は2人で活動しているのよ。

ディネーターがとても丁寧な対応をしてくれたことに感激して、根気よく自分のやりたいことを探し続けることができた、という人もいました。

そのほか、今回のヒアリング対象にはいませんでしたが、大学の同級生や大学のサークル人脈でも、グループ形成ができるのではないか、というアイデアもいただきました。50歳を過ぎると、なぜか急に同窓会のお誘いも増えるのですが、それは、子育てなどもひと段落し、自分の時間や自由になるお金が少しでき、青春時代を懐かしみ、リフレッシュしたい、という意識と同時に、同世代に仲間をつくりたい、という潜在意識も働いているのかもしれません。そのような場にボランティア・市民活動にかかわる人やボランティア・コーディネーターなどが参加した場合、場の空気を読みながら、ボランティア・市民活動の魅力について、話題にのせ、きっかけづくりをする、というも、ちょっと意識してみるとよいのではないのでしょうか？



NOTE グループの形成過程(サンプル)

- 同級生の集まりから活動グループ化
- 入門講座終了後にボランティア・コーディネーターの働きかけでグループ化
- 養成講座の修了生が自発的にグループ形成
- 行政からの働きかけに応じた、すでに別の活動をしていた人たちが実行委員会を形成

5 参加者のタイプもいろいろ

先に述べたように、ボランティア・市民活動への参加者は、いろいろなチャンネルを通して活動の流れに身をまかせるようになりますが、参加者はまさしく十人十色、実に個性的で、一人ひとりまったく違うといっても過言ではありません。だからこそおもしろいのがボランティア・市民活動ですが、それゆえに仕掛ける側、コーディネートする側が留意しなければならないこともたくさんあります。

退職世代の男性によくみられる特性

男だから、女だから、という言い方はあまり好ましくないこと、また、「男性」とひとくくりにすることは非常に多彩な人たちが世の中にはいることを考えれば無謀かもしれませんが、あえて、これまでの経験やヒアリングからうかがってきた、退職世代の男性によくみられる特性をあげておきます。よし悪しではなく、あくまでも「傾向」であり、その現われ方も人それぞれですから、参考として、記憶の隅にとどめてみてください。

先にも述べたように、退職前後の男性たちには、社会貢献感、社会における自身のお役立ち感を確認したい意識があるようです。ボランティアの行いに対して節目節目に認知／奨励／感謝を示すことの大切さは長年にわたっていわれてきたことですが、退職世代に対しても同様です。また、社会貢献感をもちたいことと表裏になりますが、正義の味方のような行動への希求もありそうです。

上記のことは、節目節目での達成感の確認にもつながりますが、その表裏にあるのが、一定のゴール・先行き・展開プロセスの提示の必要性でもあります。活動が何のため、誰のため、何ができれば成

功なのか、そこに到達するためのプロセスやタイムスパンはどのようなものか、という一定の見通しをもってかかわっていくことを望む傾向があるようです。このことは、職場で仕事をすすめていく上での方法論であり、生活習慣に身についたものからくる考え方のかもしれません。場合によっては、退職世代の人たち自身に到達プロセスを考える企画段階から加わってもらうことも一考かと思われま

す。また、退職世代に限らず男性全般の特性かも知れませんが、どちらかといえば直線的な展開のほう

が、気が楽なようです。比較的年齢層が高い女性のボランティアグループなどでは、同時並行でいろ

参加者側にとって大切な価値 過去は捨てて今に生きる

一方、参加者の側、すなわち退職世代の人たち自身が、ボランティア・市民活動によいかたちでか

わっていくには「いくつか心にしっかり留めてほしいルールがある」と現在活動にかかわっている人

たちはいます。そのひとつは、「過去の肩書きを一回しっかり捨て去る」こと。どれほど有名な大企業で高い地位に

いたとしても、地域では一年生であり、むしろ、教をいただきながら学んでいくプロセスに身をおい

ていることを自覚し、謙虚な一人の人間としてふるまわなくてはなりません。また和をもって尊しとす

じっくりたどりつけるゴールを設定

また、先にも述べましたが、退職世代の人たちがボランティア・市民活動に参加するまでにはいろ

ろな紆余曲折を経てきています。これまでの生活習慣を変えていくにはエネルギーが必要でし

6 関心のありそうな人へのアプローチのこつ

基本は同じ 入り口を広く 親しみやすく

退職世代の人たちの関心をボランティア・市民活動に向け、活動者になってもらうための具体的な進

め方の基本は、通常のボランティア・市民活動の推進の考え方・アプローチと同じことです。社協でい

うならば、福祉教育のプロセスと大きく重なります。すなわち、地域のニーズを理解し、それらに即した、さまざまな地域資源／社会資源をプラット

自主性の尊重と楽しさの演出

退職世代の人たちにボランティア・市民活動に関心をもってもらうにあたり、仕掛ける側は、あらゆる

人を対象に考えないようにすることが大切でしょう。「あまねくすべてに」の原則はとりあえずすて

て、仕掛けに関心を示した人や行動を起こした人をまずはとりこぼさないことを優先することです。今

「冷房代の節約」もお誘いの言葉に？

たとえば、先にも述べてきたように、退職世代にいつアプローチをかけるのか、誰がかけるのか、ど

ちょっと関心ある編

前向きなつづやき



- ① すでにバリバリ活動しているグループに、後からはとてもはいれないよ。これから始めたいと思う男の人ばかりの講座とかあるかな？
- ② うちの奥さんはボランティア活動で忙しくて家にいる時間も少ないんだ。僕もなにかやってみたいけど、女性が元気のグループはちょっとね…。男の人が中心のグループもあるかな？
- ③ ボランティア活動について知りたいときはどこにいけばわかるのかな？ いろいろ比べてみたいのだけれど、情報がよくわからないんだな～。
- ④ ボランティア活動って特別な技術とかあるのかな？ あまり特技がなくてもできることがあるかな？
- ⑤ 少し仕事しながらたま～にボランティア活動するってのもありかな？
- ⑥ 体力があまりないけれど、家でできるボランティア活動もあるかな？
- ⑦ あんまり人づきあいが得意じゃないし、自分から人に話しかけたりするのが苦手なだけ…。僕みたいな人はどうやって地域活動とかボランティア活動に参加すればいいのかな～？
- ⑧ もっと街のことを知りたいけれど、活動しながら自然に街のことがわかるようなプログラムってないかな～？

先の『3か月理論』からいうと、3月末で退職した後の夏頃、しばらくは自由に暮らし、遊ぶだけの生活に少々飽きてきて、人恋しくなったり、頭や身体をちゃんとつかった活動にかかわってみたい、と思いはじめた頃に「家にいるより、冷房代の節約にもなるし、ちょっとおでかけになりませんか？」と入門講座などにお誘いしてみる、などというのも、けっこううけるのではないのでしょうか？

次の中間支援の役割のところでも詳しく述べますが、地元の社協や行政と組むことによって、お誘いをかけているグループや組織などが、きちんとした組織であることを示し、安心感を演出していくことも大切です。

確かな情報提供と豊富なメニュー

人の気持ちは移ろいやすく、特に現代人はせっかちです。そのため、自分が関心をもって、情報を探したとき、すぐにめざすものが入手できないと、また気持ちがよそにむいてしまいます。適切な時に、適切な場面で、適切な人や適切なプログラムに出会えたら最高ですが、すべての人にそのような環境を提供することはとてもかなうものではありません。

2007年組以降の退職者は、若者世代とは比べものにならないとはいえ、職場で一人ひとりがパソコンをもって仕事をするようになった第一世代ですから、インターネットもある程度使える人たちが多くいます。そのため、情報を提供する側、仕掛ける側としては、インターネットの情報検索にうまくひっかかるような工夫、広報戦略もこれからますます大切になってくるかもしれません。

社協やNPOなど仕掛ける側や、プログラム実施組織のホームページやメーリングリストなどの使い勝手やコンテンツの見せ方のさらなる工夫の必要性はいうまでもないことでしょう。

イベント告知などのちらしやポスターなども格好よく、見栄えがする、あるいは気を引くものがある、心に残るフレーズがある、など、対象者の目にとまると同時に、心に波風をたてるようなキャッチがあることが求められます。

また、関心をもった人でも情報がなかなかとりにくい現実があったことも、今回のヒアリングで多々聞かれたことです。そのことに留意して、求めている人に届く方法をさらに模索する必要があります。

次善の策が、プログラム・メニューを豊富にとりそろえておくことでしょう。退職世代の多様な人びとの興味を引く、気を引くなにかが必ず提供できること、まずはそこをめざしましょう。

自ら外に出てきにくい人たちに どうアプローチするか？

ただし、特段仕掛けがなくてもすんなり地域活動やボランティア・市民活動に関心を持ち、すぐに門戸をたたける人たちは、あまり心配する必要はなく、ごく普通のボランティア・コーディネーションでことたりるはずですよ。

問題は、社協などの中間支援組織のことなどを知らず、情報入力も低い人たち、なかなか既存のメニューにのりにくい人たち、きっかけをつかみにくい人たち、などにどうアプローチするか、です。そして、そういう人たちがまずは、入り口をくぐったとして、どのようなプロセスを経れば継続性を引き出すことができるか、次項に、いくつかプログラム立案にむけての留意点やヒントを提示します。また、具体的なプログラム提案は第三章にて行います。

7 退職世代の人たちを活動にひきこむには モチベーションからメニューまで

「自分ごと」として地域を考えてもらう

退職世代の人たちの地域活動あるいはボランティア・市民活動への参加を推進するにあたっては、まずは、退職世代の人たち自身のモチベーションを彼らのなかにしっかり根づかせることが必要となります。そのひとつの切り口として、「自分ごととして地域を考えてもらう」ことがとても大切ではないかと考えられます。

右頁の例では、大きな問いから、身近に引きつけて、さらなる問いを深めていくことによって、問題に気づき、自分としてそれらにどう対応したいか、自ら考えていくはずみにしよう、というものです。自分が暮らす街がどうあってほしいか、自分に引きつけて考えられるきっかけを提示し、地域のこと、社会のことを「自分ごと」として考えられれば、活動への意欲がしっかり定着するのではないのでしょうか？

趣味や特技が生かせることは幸せ

また、退職世代に限らず、人は、自分の好きなこと・趣味・得意なことを、もっと深めたい・人の役に立てたい・誰かとシェアしたい・誰かに自慢したい願望をもっています。退職世代は特に、これまで仕事中心の暮らしで、なかなか趣味や関心事に時間を割くことができず、もどかしい思いをかかえてきた人が多いので、そのような切り口から場を提供し、そこで、仲間をつくってもらったり、活動を自分で考えたり、など背中をおしてあげてみるのもひとつでしょう。

「しみんふくし滋賀」が借りている、近江商人の邸宅の庭は、何十年も放置され、まるで森のように木が生い茂っていたそうです。そこで、退職世代向けの園芸教室で学んだ退職世代の男性たちが、実習場所・技術を生かす場所として庭の手入れに協力することになり、教官の指導のもと、実に見事に庭として再生させ、いまもそのメンテナンスに定期的に入っています。そのほかのグループでも、運転好きの人たちが移送ボランティアとして活躍したり、大工仕事・修理仕事が得意な男性たちが、作業所の備品をつくったり、作業用具の工夫改良に知恵をだしたり、など、特技を生かして実に楽しそうに活動を続けていました。

ある町では、鉄道模型マニアの男性が、個人所有のジオラマを商業ビルの一角にもちこんで、通りすがりの人誰でも一緒に遊べるようにし、子どもからお年寄りまでいろいろな人を楽しませています。これも、自分の楽しみであるとともに、地域の人たちの会話や交流を促し、地域の人たちの絆を深める、ボランティア・市民活動のひとつのかたちといえることができるでしょう。

お試しの間口は広く

ひとくちにボランティア・市民活動といっても、その分野、種類、活動形態は、千差万別です。ボランティア・市民活動に関心をもった人たちのうち、当初から、やりたいことや、関心領域が明確な人は、比較的に簡単に情報を入手できるのですが、どのようなことができるのか、どのような参加の仕方があるのか、具体的にはどのような活動をしているのか、ほとんど知識や手がかりがない人たちのほうが多いのが現実でしょう。

そのような人たちが訪れてきたとき、入り口のプログラムの間口の広さ、バラエティの豊富さ、そし

て相談者やコーディネーターの対応の良し悪しが、その後、彼らが実際に活動者として定着していくかどうかの大きな分かれ目になると思われます。

メニューはそれこそ、無限に考えられるわけですが、魅力的で、親しみやすく、気軽にお試ししてみたいと思わせるようなプレゼンテーションにも配慮が必要でしょう。また、必ずしも、活動に直結していないように見える街歩きや農業体験プログラムでも、そこで発見したことや、気づいたこと、あるいは感激したことなどから、ボランティア・市民活動に展開していくことは、推進者にとっての醍醐味です。そこで参加者に、なんだかこの先楽しいことが待っていそうだ、という期待感をもたせるのも、



モチベーションづくりのヒント

- 70歳になったとき、自分の街がどうあってほしいか？
どんな環境で暮らしたいか？

どのようなことが課題になるのだろうか？
そのためには何が不足しているのだろうか？

自分が改善にかかわれることがあるのだろうか？

みんなでどのようなことができるだろうか？

それをイメージするには、
自分の街の今の姿も
知らなくては……



- 大規模災害がおきたら自分の街はどうなってしまうのか？

災害時の支援体制はどうなっているのだろうか？

災害時にはどのように身を守ったらいいのだろうか？
地域の人たちとどのように助け合いながら生きていくのだろうか？

災害被害を軽減するにはどのようなことができるだろうか？

災害時の支援活動にはどのような技術が必要になるのだろうか？

みんなで勉強したり、
話し合ったりしなくては……



コーディネーターの腕のみせどころかもしれません。

そして、具体的な活動にすすんでいくなかで、たとえばコーディネーターが、丁寧なコミュニケーションをとることにより、信頼関係を深め、よき相談者・アドバイザーとして、かかわっていくことはとても大きな力になります。



8 グループ長続きのこつ

あ・うんの呼吸で ゆるやかに フラットに

今回、ヒアリングにうかがったなかで、楽しそうに活動を続けておられるな～、と感じられたグループの共通項をあげてみると以下ようになります。

- *グループの会則などはないし、ないほうがうまくいく、と思っている。活動の出入りも自由で、しばらく顔を見せなかった人が、久しぶりに来ても、あたりまえのこととして受け止めるし、活動に参加できないことが続いても非難されない。
- *グループメンバーの会費がないところも多く、あっても月に500円程度（飲み食い代はもちろん別ですが）。ただし、NPO法人の場合は、会員制度をしつため、コアメンバーが会費を支払うばかりではなく、サポーター会員などの会費を設定しているところもあり。活動にかかる経費は、バザーなどに出店して販売活動をしたり、スーパーのレシート還元制度を利用したりして造成。まとまった事業の場合は、社協、行政、財団などの補助金を申請することもある。
- *月1回の定例会は、どこのグループもほぼ共通して実施。ここで、いろいろなことが検討され、決まるとともに、活動を続けるエネルギー源のひとつであり、最大の楽しみになっている模様。
- *事務所や事務局は、法人格のある組織以外は、ほとんどのグループがもっていない。書類や記録などが必要なものについては、メンバーの誰かが必ずもっているから、大丈夫、といったゆるやかな暗黙の了解でクリア。
- *活動は、無理なく、負担感なく、楽しく、が鉄則。自分たちが楽しいからその楽しさのおすそわけをする、という感覚。趣味・特技を生かせる活動が入り口になる場合も（ただし、押し売りになってはだめ）。
- *外部からの依頼については、ボランティア・市民活動として実施することがふさわしい、とメンバーが感じるものだけを引き受け、時には、お断りする勇気ももつこと、と考えている。活動の意義を納得できることを大切にしている。
- *組織的には、フラットな関係・フラットな運営に徹し、柔軟で、あ・うんの呼吸でものごとをすすめる。役割分担はあるけれど、メンバーみんなが共同リーダーのようなもの。
- *短期・長期の目標や夢をもっていること。たとえば、愛知県の「半田市災害支援ボランティア・コーディネーターの会」は「人口100人に一人は、災害時の知識をもっていることが望ましいので、研修修了生を1200人にまでしたい」という目標をもって研修会を地区ごとに開催している。また、群馬県太田市の「よるすや余之助」は、「次は、若者を巻き込んだフォーク喫茶活動を展開したい」など、自分たちのやりたいことの実現に向けて着々と動いている。
- *グループのサイズや活動範囲などを無理に広げること、組織を大きくすることなどには、ほとんど関心がない。マイペースでできる範囲を丁寧に、という身上を貫く姿勢。

「男性だけ」がいい？ それとも？

グループメンバーは「男性だけだからいい」のか「メンバー構成にはこだわらない」のか、いろいろな意見があります。今回は「男性だけのほうがグループとしてはやりやすい」とおっしゃる方たちにた

楽しんでいる人たちからのエール



- 1 僕は退職前からセミナーとかに参加したから、ときどきボランティア活動したり、仕事もちょっとしたり、めりはりもって楽しくらしているけど、Bさんは急に老け込んでしまって心配だな～。僕の参加しているグループは楽しい仲間もフランクな人ばかりだからこんど誘ってみようかな。
- 2 近所のKさんに誘われて近くの福祉作業所の修理の手伝いに行ったら楽しくってすっかりはまっちゃったよ。家じゃできない大工仕事も思う存分できるしね。最近は、他の施設からお声がかかるんだ。
- 3 うちの奥さんにちらし渡されて、あんまり興味なかったんだけど閑だから行ってみた「地域を歩こう」ってプログラムが発見がいろいろあって楽しかったものだから、すっかりレギュラーになってね。いまそのグループでは、災害の時の避難経路を調べたりもしているんだ。
- 4 昔からの仲間が集まったときに、俺らもいい年になって、自分たちだけで遊んでいてももったいないから、自分たちの特技や技術を地域におすそわけしよう、なんて殊勝なこと考えたやつがいてね、それでいま「べんりやさん」稼業をときどきやっているよ。地域にはちょっとしたお手伝いが必要な人ってたくさんいるんだよね。
- 5 仕事をめてぶらぶらしていたら、近くに市民農園があったので、さっそく会員になって農業のまねごとしているよ。隣の区画を借りている近くの保育園のおちびさんたちともすっかり仲良くなっちゃって、孫がたくさんできたようなものだね。保育園のバザーにお野菜を出品することもあるよ。
- 6 地域にはたくさん発見があるよ。まずは経験してほしいね。



- 7 退職したら趣味三昧って思っていたんだけど、家ではなかなかスペースがないから、近くの商店街の人と話をし、鉄道模型のジオラマを子どもたちと一緒にできる場所をつくってもらったんだ。毎日、子どもたちがたくさん寄ってくれるし、子どもだけじゃなくて、大学生や大人もくるから友だちもふえたよ。近くの障害のある子どもたちの施設に出前する話もできたんだ。
- 8 このあいだ友人に会ったら「ボランティア活動って儲かるの？」なんてきかれちゃったよ。もっとボランティアについてきちんと知ってもらおう努力が必要だね。
- 9 地域のことや社会のことに関心のない友だちに、自分がやっていることをうまく説明できなくてね。どうしたら、このおもしろさをうまく伝えられるかな～。
- 10 退職する前から、少しずつでも、自分の暮らし方とか趣味とか地域のつながりとか、ちゃんと考えたり、準備しておけばもっと楽しかったかもしれないな～。もちろん、退職後でもまにあうけどね…。
- 11 あんまり最初からリキいれないで、ぼちぼちやればいいんじゃない。無理はしないが一番だよ。
- 12 ボランティアだからっていい加減なことほしくないよ。たまり場で提供するコーヒーの質にはとことんこだわっているさ。もちろん赤字にならない範囲だけど。
- 13 これまで会ったことのないような人に出会えたのがうれしいね。今では地域の仲間が僕の宝物だよ。
- 14 難しい問題にぶちあたっても、後に仲間がいてくれる安心感があるから、前に進めるよ。
- 15 人間関係に上下関係がないこともいいね。

くさん出会いました。といって、女性と一緒になにかやりたくない、というわけではなく、ほとんどのグループが、女性たちとはいい距離感をもって、協力関係にあります。

たとえば、廿日市市の「壮年チーム」の高齢者や障害者の旅行プログラムには、女性がサポーターとしてたくさんかかわっています。グループのメンバーがかかわる配食サービスの食事をつくっているのは女性のグループで、配達の一部を男性が担当しています。

一方「男性だけで活動していると、経験も少なく、議論が限定されてしまうので、女性ともっと一緒にやったほうがいい」という意見を表明された方もおられます。

グループの構成員が男性だけのほうがうまくいく、と考える人たちが多くおられたのは、たぶん、先に述べたように、男性と女性で、物事の進め方や、思考プロセスなどが気質的にあるいは、習慣的に異なる場合が多いことによるのでしょう。

特に退職世代の男性は、長年の職場勤めで身についた人間関係のとり方、時間の使い方、生活の様式から脱却・巻き戻しをして、地域での生活時間や地域での人間関係のつくり方に慣れ、自らのものにしていくプロセスを通る必要があるようです。そして、そのプロセスの渦中は、むしろ、男性同士で粛々と活動したほうが「ペースが守れて気が楽」という人たちもいます。他方、だからこそ男性だけで活動しない方がよいのではないか、という意見もあります。

シンボルをもつことも

ヒアリングをさせていただいたグループのいくつかは、活動の際に身につけるそろいのジャンパーやエプロン、帽子などをつくっていました。グループメンバーとしての絆を強めることになるとともに、活動者の身元を明らかにし、責任と信頼の証しとしての意味あいもあります。

いずれにしても、上下関係やがちがちの組織論理に縛られない、柔軟で民主的なグループ運営が、グループ長続きのコツのようです。

9 課題と価値

ジェネレーションギャップ

いわゆる団塊の世代といわれる年齢層の人たちと、直近の上下の年齢層は、必ずしも、友好関係にはないらしい、という指摘もあり、そのため、すでに活発に地域活動やボランティア・市民活動にかかわっている退職世代の人たち（65歳以上、中核は70歳代ぐらい）のグループに、新たに退職した人たちがすんなり入っていけるかどうか、については配慮が必要かもしれません。もちろん、ケースバイケースであるとは思いますが、これから活動に参加していこうという人たちが、既存のグループにうまく入れそうか、あるいは、別のグループを新たに立ち上げたほうがうまくいくのか、コーディネーターがよくみきわめることも必要でしょう。それぞれの人の性格や行動パターンによって、初期段階から自分たちで遠慮なく自由に議論できたりものごとを決めたりできるほうが、やる気をそがれることなく続けられる人もいるでしょうし、むしろ、すでに実績のあるグループで、先輩たちの経験を吸収しながら活動することが気性にあっていない人もいるかもしれません。

無償性と経費の考え方

ボランティア・市民活動は無償であるべきだ、という考え方があります。一方で、助け合い組織、いわゆる住民参加型在宅サービス団体などは、有償であることが、利用者と担い手の関係をよくする、と考えています。最近のコミュニティ・ビジネスなども、儲けることが目的ではないけれど、事業を円滑に動かす資金はきちんと稼ぐべき、という考え方にたっています。経費や事業費収入の創出・還元などは、非営利性が明確であれば、無償性をないがしろにするものではない、と考えられていますが、そのあたりは、受け止める人によって微妙にずれがあるようです。

退職世代がボランティア・市民活動にかかわる場合、経費の負担について、二つの相反する意見が聞かれました。

「退職世代は年金しか収入がないので、里山の手入れや援農などで遠出する際の交通費がかさむとつらいし、活動への参加回数を制限しなくてはならなくなるから、交通費などの必要経費は支給されてもよいのではないか」という意見に代表されるものが一方の主張。

もう一方には「自分たちは、あくまでもボランティアとして、自分たちのベストをつくすことにプライドをもってかかわっており、経費負担も含めて自分たちが責任をもってこなしたい。謝礼をされたり、経費を負担されたりしたら、かえって参加しにくくなる」という意見に代表されるような考え方もあります。

これらは活動に参加する退職世代の人たちの経済状況や、逆に活動先の経済状態もファクターとなることでしょう。長く継続してもらうには、参加者側のもちだしは少なくおさえて、負担感を軽減したい、という意識も働く一方、経費を支給されることによって、自由裁量の範囲が狭まっていやだ、という意見もあるでしょう。

これは、どちらが正しい、とか間違っている、ということにはならないでしょう。ただ、参加する人たちと、それを仕掛ける人、あるいは活動先の人などが、きちんと、ルールを確認する話し合いを適宜もつことは必要ではないでしょうか？ もちろん、慎重な議論と慎重な仕掛けが必要になると思いますが、経費の負担感でやる気のある人を排除することになってしまったら、それこそもったいない…。

過疎や経済的に厳しい条件にある地域の課題

中山間地や、第一次産業を生業としている地域では、若い世代が都市部に流出し、人口も減り、高齢化もすすむなか、ボランティア・市民活動以前に、地域のさまざまな役割を果たす人材すらたりない、という現実があります。ボランティア・市民活動で地域ニーズに対応したくても、担い手が少ないために、人材の引っ張り合いもおきています。本研究では、そのような地域にどのような支援を提供するか、というところまで踏み込むことはできませんでしたが、今後の地域福祉の重い課題として受け止め、考えていきたいと思えます。

退職前からの取り組みの充実を

ヒアリングをした方たちの多くから「できれば退職前から準備をすることが望ましい」というご意見をいただきました。「退職してからでも、もちろん時間はあるけれど、退職前から、いろいろな可能性について調べたり、体験したり試してみても、自分が好きなことを見つけたり、関心領域を確認し、そのうえで、自分のこれからの生き方の方向性を考えておいたほうが、安心して退職できるはずだ」というのです。

そのためには、中間支援組織が、もうすこし、前倒しで対象世代のことを考え、プログラム企画などをしていかななくてはならないでしょう。中間支援組織の役割の章で、このことにあらためてふれます。

一人ひとりが生きいきと暮らしていくことができるように

本研究のなかで、わかったことは、いかに退職世代が多様であり、その世代の人たちに、ボランティア・市民活動に関心をもってもらったり、参加してもらったり、中核リーダーになってもらったりしたい、となれば、その多様性に見合った対応を仕掛ける側もしていかななくてはならない、ということです。

同時に、それは、こと退職世代に限ったことではなく、あらゆる年代層についても共通してもつべき認識であり、姿勢でしょう。

ただ、これからしばらくの間は退職世代が大きい塊として存在することから、ここでの経験がポジティブであるかどうかは、今後の中間支援組織や、NPOなどに大きな影響を与えることとなります。

退職世代が地域に戻ってくるペースが当初よりずっと遅く、また散発的でもあることから、まだ結論はできませんし、一方、これからどんどん軌道修正も新しい動きができる可能性もたくさん残っており、歩きながら考えていくことこそ、今大切にすべきことでしょう。

ボランティア・市民活動を私たちが自ら行う、あるいは推進する理由は、人が人として支えあいながら、心ゆたかに、生き生きと暮らせる社会に私たち、みんなの手でしていこう、という営みであるからで、これまで、仕事中心の暮らしで、周囲のことや社会のことに積極的に参加できなかった退職世代の人たちにも、ぜひ、その一翼を担ってほしい、という願いに基づいています。私たちが、地球の恩をいただきながら暮らしている生活者であり、一市民として社会を変えていく主体であるのだ、ということに退職世代の人たちが、あらためて思いをはせ、気づききっかけづくりのお手伝い、そのひとつの手法として、地域活動やボランティア・市民活動への関心をひきだせるような仕掛けをつくっていききたいものです。

II

中間支援組織等の役割



1 中間支援を担う組織のバリエーション

退職世代にかかわる啓発、広報、あるいはボランティア・市民活動等への参加の働きかけなどについては、地域のNPO等が直接実施する場合がありますが、特に、啓発／広報、ならびに活動参加へのきっかけづくりなどについては、中間支援型の組織が関与するケースが多くみられます。

なかでも、退職世代については、いわゆるボランティア・市民活動の推進と大きく異なることとして、行政（地方自治体）の積極的な関与がみられることです。都道府県レベルでも、市区町村レベルでも、いわゆる「団塊世代」は政策のターゲットのひとつと位置づけられているようです。そのため、ここでは行政も「中間支援組織」として整理しました。

そのほか、都道府県・指定都市社協、市区町村社協、NPOセンターなどが中間支援組織としてさまざまなかわりをしていますが、さらに退職世代の活動に特徴的であると考えられるのは、退職世代が中核になって活動しているNPOなどの活動組織そのものが、中間支援的な役割を自ら果たしていることです。

2 中間支援組織・行政の役割

中間支援組織の役割とはどのようなもので、どのような動きをするものなのでしょうか？ 一般には、以下のようなことがあげられるかと思われます。



中間支援の役割／機能

- 啓発・広報
 - 活動推進のための仕掛けづくり
 - プログラム企画
 - プログラム実施
 - 資金援助
 - 相談相手／トラブルシューター
 - 活動先や活動グループのマッチング
 - モデル事業
 - ネットワークづくり
 - 事例紹介、助成金プログラムなど、情報提供
- など

それぞれの中間支援組織の特徴や条件により、その役割や機能の果たし方には濃淡あるいは方法論の違いなどがあります。

特に、NPOが中間支援的な役割を果たしていく場合、自らの経験・ノウハウをベースに、臨場感や現実性のある情報提供、コンサルテーションなどができるため、これからこの分野に参入しようとするNPO等にとっては、一種のモデルとしての意味合いもあります。

3 組織特性を生かした中間支援の方法

1. 行政の場合 政策課題として

行政が退職世代にアプローチする場合、1) 自らが直接、企画実施にあたる、2) 地域ですでに活動をしている退職世代の人たちなどに声をかけて実行委員会を形成して企画運営にあたる、3) 社協やNPOなどに補助金を提供してプログラム実施を促す、などのケースがみられます。

退職世代のプログラムへの行政関与というと、都市部において、公民館や教育委員会など、どちらかというと教育系の部署が従来の生涯学習プログラムのひとつのスタイルとして、退職世代をターゲットに、趣味の講座のメニューにバリエーションを加えたり、いわゆる退職後のライフプランニングや、生活力アップの講座などを中心に行っていくことが多いようにみられます。

1) NPO との協働で地域回帰を仕掛ける

ヒアリングにうかがった青森県の場合は、若干事情が異なります。県庁の企画政策部が県の施策として、特に首都圏などに暮らす、主として青森県や東北地方出身の退職世代のUターン、JターンさらにはIターンなどを誘致することを主目的として、退職世代応援サイトを運営して、退職世代の暮らし方への情報提供や提案などをしたり、東京で青森での暮らしのよさをアピールするイベントを行うほか、青森県内のNPOなどと協働して長期滞在、ひいては定住の誘致を視野にいれたプログラムを実施しています。

特徴的なのは、ただだんに、観光や余生をゆっくり過ごす、といったことにとどまらず、退職世代の知識／経験を青森にもちこんで活かしてほしい、社会的な活動にかかわることにより、地域の活性化に寄与してほしい、という意図を含んだメニューが用意されていることです。

昨年実施された、青森お試しステイのプログラムでは、県内いくつかの地域にNPOのコーディネーターを委託し、地域での滞在先や日常のプログラム企画／連絡調整などを任せています。助走期間が短かったこともあり、参加者の数は決して多くはなかったようですが、参加者の反応は上々で、リピーターになりそうな兆しがあり、今後の展開が期待されています。

2) 実行委員会方式

調布市と鎌倉市では、いわゆる実行委員会方式ですすみました。すでにボランティア・市民活動にかかわっている退職世代のメンバーに声をかけ、行政とともに、あるいは行政の支援のもとグループを形成し、そのグループが中心になって、退職世代のニーズに寄り添った地域デビュープログラムを企画／運営してきています。

調布市では、「地域歓迎会実行委員会」が2007年に大規模な地域デビュープログラムを実施したのち、「調布わいわいサロン」という名称で、毎月、市民活動支援センターの一角で、ボランティア・市民活動などに関心のある退職世代が気楽に立寄って活動やプログラムについて相談できるコーナーをもうけ、実行委員のメンバーがそのままサロンの運営委員となって対応しています。ただ、相談コーナーを開設するだけでは、なかなか人が集まってこないことから、最近は、毎回、テーマを決め、関連した活動を行っているNPOのメンバーを招聘して、ミニトークを行うほか、まち歩きの会やそばうちの会など、魅力的なプログラムの実施も併せて行うようになっています。

鎌倉市の場合は、行政とNPOのメンバーによる協働組織である「鎌倉団塊プロジェクト実行委員

会」が大がかりな地域デビュープログラムをこれまで数回実施してきました。鎌倉の地域資源であるお寺の協力を得ていること、退職世代が関心のあるプログラムをすでに実施しているNPOのメンバーが自身の経験を語ったり、料理教室で腕を磨いた男性たちが交流会のつまみを調理したり、など、当事者感あふれるプログラムづくりが魅力で、毎回、とても多くの参加者があります。夫婦での参加が多いのも特徴的です。

3) 安心感の提供も行政の役割のひとつ

実際にそのような実行委員会等で、企画／運営に携わっている退職世代の方々にお話をうかがいましたが、非常に興味深かったのは、行政がバックについていることへの安心感のようなものへの言及があったことです。呼びかけに応じてデビュープログラムなどに参加する人たちにとって、行政が協賛なり後援なりしていることが示されていることが、一種、主催者の正当性や妥当性の担保のような役割を結果的に果たしているようです。

また、先にも述べましたが、地域になんのつながりももたなかった退職世代の方々が情報を求める先として真っ先に活用した、とあげられたのが戸別配布であったり、新聞などに折り込まれる市町村報などの自治体からの広報紙だったことも、行政に対する退職世代のイメージがうかびあがってきます。

地域のことかわからない、あるいは、ボランティア・市民活動のことなど全く知らない人たちにとって、行政が支援している、行政の広報紙などに掲載されている、ということが、ひとつの判断基準になりえることも、今後、退職世代にかかわるプログラムを運営していくものにとっては、大切な留意点のひとつと考えられます。

2. 社会福祉協議会 地域での窓口として

退職世代が地域生活者となるための支援に最も近いところにいるのは地域の社会福祉協議会といえます。

社協がその特性である地域密着性と地域資源をつなぐことができるネットワーク性を最大限に活かすことができれば、退職世代の地域回帰にさまざまな形で支援を提供することができます。

都道府県・指定都市レベルと市区町村レベルでは、若干、その特性によって役割の果たし方や行動様式に差が生じる場合もあり得ますが、おおむね共通する主な機能は右頁の囲みようなことになるかと思われれます。

1) 都道府県レベルの社会福祉協議会／社協 VC

広域を意識してダイナミックに

都道府県／指定都市社協は、多くは県庁所在地にその事務所を構えることもあり、大都市圏でなくても、その傘下のどの地域よりも、退職世代のターゲット人口が多く居住あるいは勤務地として通過する場であることから、退職世代向けの啓発／広報プログラムなどを最も効果的に実施しうる可能性をもっているといえます。

また、広域の情報収集／発信の拠点としての役割や、広域の助成金や補助金などの窓口あるいは情報集積点としての役割も大きいと考えられ、たとえば全国動向の紹介や事例紹介を行ったり、県下のいくつかの市と協働して広域のプログラムを仕掛けたり、など、ダイナミックな展開も期待されます。

著名な人の講演などを組みこんだ啓発イベントなども、広域対象ならば実現可能ではないでしょうか？

先に述べた、過疎地域や限界集落におけるボランティア・市民活動についても、県レベルの社協が広域で研究会を仕掛けたり、広域のプロジェクト企画を複数の当該地などとつくっていくことなども今後の取り組み課題と考えられます。



社協が果たす役割／機能

- 退職世代に対する、地域活動やボランティア・市民活動にかんする広報／啓発活動（冊子・セミナー・イベントなど）・情報提供（ニュースレター・ホームページ・メーリングリストなど）
- 退職世代に対する地域内のNPOやボランティア・市民活動グループの紹介／活動相談
- 退職世代によるNPOやボランティア・市民活動グループの立ち上げ支援
- 退職世代を主たるターゲットとした具体的なプログラム企画・実施（入門講座、養成講座、退職世代を中核にすえたテーマ設定型プログラム、多世代巻き込み型プログラム など）
- 退職世代をターゲットとする地域活動推進プログラムなどへの資金援助(自らの資金による／他団体等による助成金などの紹介 など)
- プラットフォームの形成による地域における退職世代をターゲットとするプログラム企画推進

退職前からの働きかけを 企業や労組との協働も

さらには、企業や労組との連携による退職前講座の仕掛けも今後、ぜひ積極的に推進してほしいところとす。

地元の企業や商店会、あるいは大都市に本社をもつ企業の支社や営業所、労組など、勤労者層のライフプランニングに影響力を及ぼす組織と連携し、退職前のライフプランニングセミナーにボランティア・市民活動について社協のスタッフが外向いて語るができる時間帯をつくってもらう、ボランティア・市民活動にはまった退職者たちの経験トークの時間帯をつくってもらう、プログラムの一環として、ボランティア・市民活動体験プログラムを組み込んでもらう、など、いろいろな仕掛けがあるかと思われれます。

また、勤労者が週末などに参加できる、お試しプログラムは、これまでもさまざまなプログラムが実施されてきていますが、さらにパワーアップして、気軽に、でもなんだか自分のためになりそう、これからの生き方に示唆を与えてくれそう、だと感じてもらえるような工夫をしていきたいものです。

ただ、退職世代の人たちは、社協の存在そのものを知らない場合も多々あるようです。社協の可視化やPRIについてはまだまだこれからも努力が必要な分野だと思われ、活用できる機会をどんどん増やしたいものです。

2) 市町村レベルの社会福祉協議会／社協 VC

市区町村社協／社協VC（以下：社協）は、地域に最も近いところにある特性を活かした支援を行うこととなります。特に、地域内の顔の見える関係を最大限に活かし、自分たちだけで、というよりも、地域のさまざまなボランティア・市民活動組織やグループ、あるいは個人や事業体、商店、あるいは、町内会や消防団など地縁組織等の資源と組んで、支援を行ったり、実際にプログラムを仕掛けたりすることになると考えられます。

地域を知り地域につなぐ

地域でこれから必要とされるサービスや活動について、社協がきちんと把握できれば、あらたに地域でなにかをしたい、と考えている退職世代がそのようなニーズに対応できるような活躍の場を考えて参加してもらえるよう、仕掛けをつくっていくことができるでしょう。また、地元のさまざまな資源との協働によるプログラム推進こそ、地元密着の市区町村社協の特徴を最大限に活かせる手段だろうと思われれます。

市区町村社協に最も期待されるのは、退職世代の気持ちやニーズに丁寧にそった相談活動やプログラム企画、実際に活動にかかわった人たちの支援やフォローアップではないでしょうか？ 地域内で顔の見える関係、よい信頼関係を築きながら、退職世代の人たちの支援をしていきたいものです。

3) プログラム作成・実施におけるポイント

社協らしさを大切に

退職世代への働きかけを強めているのは、社協だけではなく、先に述べた行政関係機関、特に、取り組みのパターンが相似しがちな公民館などの生涯学習系の施設などが、いわばライバルとして存在します。地域における最も大きな人口層である退職世代以上の年齢層の人たちに、社協の存在意義をどれだけアピールできるか。地域活動の中核であり、頼りになる存在であることを実感してもらうことは、これから先の社協のありかたにも大きな影響をもつものと考えられ、そういった意味からも、ことさら丁寧な企画と対応が望まれます。ほかでもやっていることではなく「わが社協だからできること」をぜひ地域の知恵を借りながらつくっていききたいものです。そのためにも、これまで以上に、多世代、多彩な背景や守備範囲をもつ人々による、混成チームであたっていくことが大切になるのではないかと考えられます。

地域の特性にも留意

今回、さまざまな地域にヒアリングにいくと、あたりまえのことではありますが、その地域の固有の文化や習慣、経済状況などが、ボランティア・市民活動にかかわる人たちのグループ形成過程、活動方法、活動内容などに、非常に強く影響を及ぼしている事例に多々遭遇しました。

退職世代のボランティア・市民活動というと、どうしても、都市部のサラリーマンがどうかかわっているのか、ということに関心がむきがちですが、地元の自営業の方や、農林漁業など第一次産業に従事されておられる方が多くかかわっておられます。一方で、地元の産業がふるわず、勤労世代は役場や電力会社など、公共機関系の職員を除くと、ほとんどが他の都市などに流出している場合があります。切実な地域ニーズはいろいろあるし、活動メニューをつくりたいと思いつつ、現実にボランティア・市民活動の担い手人口が極端に少ないので、かんたんにはボランティア・市民活動の推進、などといえない地域もあるのです。

また、「三代住まなければ江戸っ子といえない」などといわれていますが、各地で、定住して数十年たってもいまだ「よそもの」扱いされ、地元の祭りや、地元の役回りから排除されている場合が多々あるようです。

退職世代のボランティア・市民活動は、そういう意味では、地域の役目が回ってこない人や、地元でのつながりが薄いために、別のアプローチからしか地域にかかわるしかない人びとにとって、大切な地域参加の窓口になっている場合があちらこちらであるようです。

実際、何か所かで、「社協がよびかけるグループでなければ、転入者の自分が入れる地域の活動の場はなかった」とか「うちのグループはほとんどが、転入者ばかりで、地元生え抜きの人はいない」といった声がきかれました。

一方で非常にデリケートな地域事情がありつつも、その地に新たな風をふきこもう、とさまざまな動きもできてきています。

ある過疎の町では、1ターンしてきた、近隣出身の退職世代の人が、地域に戻ってきた、あるいは転入してきた人々をネットワーク化し、互いに助けあったり、情報交換したり、交流したり、ということをはじめ、というお話もうかがいました。いずれは地域にもともとある活動とつながることも視野にいれてのこと、で、少しずつ前進を始めているようです。

脳内
イメージ

おまけ

社協スタッフのつぶやき



- ① 知らなかったな～団塊世代の本音。65歳までは働きたい人の方が多いうんだったって…。
- ② 退職を3月に控えた局長に「これからどうします？」と聞いてみたら、「年金をもらえるようになったらボランティアしようかな」だって…。
- ③ 待っていても来てくれないんだよねボランティアさんは…。
- ④ もちつきボランティアを〇〇さんに頼んだら、知り合いも誘ってくれて結構楽しそうにやっていたよね。直接頼むと必ず手伝ってくれる。「また何かあったら手伝うから」だって。ありがたいです。
- ⑤ 「団塊世代向け」のプログラムを打ち出すよりも、普通のプログラムをちょっとだけ工夫して退職世代の人たちに参加しやすいものにしたほうがいいのかな。
- ⑥ やっぱり、友だちや知り合いのお誘いが強力な推進力ってことだね。妻の一声も効果大らしいね。
- ⑦ いろいろな知識や技術をもっている男性が参加してくれるとボランティア・市民活動もぐんと幅が広がるし、奥行きができるだろうな～。
- ⑧ 退職世代の人たちと夢と希望のあるプログラムづくりをしたいな～。
- ⑨ 退職世代の人たちって普通のボランティアさんとは違うルートで情報を入手するみたいだね。

愛知県半田市では古くからの「同年会」組織（集落の同じ年に生まれた男性だけが入れ、厄年のときに地元の祭りを仕切るなどの役割を担う）が健在で、「半田市災害支援ボランティアコーディネーターの会」も、コアメンバーがもつ同年会とのつながりを大切にしつつ、転入者が地域における活動で排除されないよう、工夫をしながら同じまちづくりを担うものとして協力関係にあります。

コミュニティは、必ずしも同じ地域内を示す言葉ではなく、同じ趣味の集まり、同じ問題意識の集まり、同じ文化圏、などによっても形成されるものであり、退職世代のボランティア・市民活動についても、新たなコミュニティ・新たな文化の創造、という側面から考えていくことも大切でしょう。

コーディネーターが鍵 KYからHYへ？

先に、チームでの働きかけの大切さを述べましたが、それでもなお、キーになるコーディネーターの力も非常に重要です。前章でも述べましたが、空気を読むのと同じように、人を読む、すなわち、人の適性、性格、行動パターン、思いなどを読み取って、その人がベストにふるまえる環境につないでいくことができるか。あるいは、新たに動き出したグループなどに適切なアドバイスや支援をできるか。いかに丁寧なフォローアップができるか。そこに、退職世代（に限りませんが）の人たちが楽しんでボランティア・市民活動に参加し、継続していけるかどうかのポイントが隠されているのです。

まずは相手をよく知るためにコミュニケーションをたくさんとって、相手への敬意をベースに信頼関係を切り結ぶこと。そこからはじめましょう。

長期構想をもって

さらにいうならば、これまで「2007年問題」などといわれてきましたが、退職世代の人たち自身、退職後の暮らしのビジョンがたっていない場合が多く、また、もう少し働きたい意識が強いことから、完全に地域人として地域に戻ってくるには、まだ数年の猶予期間があると考えられています。

また、今後も、数は減るとしても、退職後の生活設計を必要とする人たちは毎年輩出されるわけです。これまでの退職世代への取り組みから次への展開のヒントをたくさん読み取り、次の世代へのモデルをつくっていく、というぐらいの気構えで、実際に地域に退職世代がたくさん戻ってくるときに彼らをつかめる中間支援ができるように、いろいろな取り組みをすることが必要です。

退職者世代へのかかわりは、まだ端緒についたばかりですから、あせらず、でも長期ビジョンをもって、自分たちの地域をより暮らしやすいところにするパートナーとして退職世代の人たちとともに、いろいろな展開を生み出していきたいものです。

4) NPO 支援センター（都道府県域・市域）

NPO支援センターが、中間支援組織としての動きをする場合、その方法や機能そのものは、社協と大きな差はないかもしれません。ただ、社協と異なるとすれば、関係するNPOの分野の幅が広いことから、多彩な分野からのプログラム提案やコーディネート機能を果たしうる可能性があることでしょう。また、福祉系以外の行政系補助金の情報や窓口機能、財団などによる助成金情報なども、幅広く収集・提供できるのも、強みといえます。

社協からみれば、NPOセンターは、よきパートナー、大切な地域資源として、協働プラットフォームにはぜひいてほしい存在となるはずで

5) NPO や活動団体

中間支援を主たるミッションとしないNPOやボランティア・市民活動団体／グループもまた、機能として中間支援を実施しうることで、今回の研究事業のヒアリング先で多くの事例に接したなかから明

らかにになりました。

全国的にひっぱりだこ

その最たるものは群馬県太田市の「よろずや余之助」というNPOです。

高校時代の同級生の仲間が、中年にさしかかり、すこしは世の中に恩返しをしよう、と自分たちの楽しみのおすそわけのような感覚ではじまったグループ。グループの拠点には、コーヒーや軽食が供される喫茶スペース、地域の人たちがちょっとした集まりに使えるスペースなどがあり、地元の特産品や地元の人たちがつくった作品の販売コーナーなどもあります。

これらのスペースは、いわば貸会議室や集会所の機能をはたすとともに、自らのグループの主催する講演会や映画会などのイベント会場にもなります。また、週に2回、よろず相談を実施。地域の人たちのちょっとした困りごとに耳を傾けています。これら、自主事業の仕掛け方、人の巻き込み方は社協のおかぶを奪うほどに地域資源をプラットフォーム化したプロデューサーぶりです。

そして、このような活動ぶりがさまざまな機会にとりあげられるようになり、余之助はいまや全国区で有名なNPOになり、代表はその顔として講演にひっぱりだこ。その考え方や活動のこつなどを各地の志ある人たちに伝授しています。

協力者をまきこみながらコーディネート

広島県廿日市市を拠点とする「壮年チーム」は、チーム全体としての活動のメインは年に1回、お年寄りや障害のある人たちの旅行。その旅行に協力者を得るプロセス、PRのプロセス、実際にさまざまな手配をするプロセス、すべて、中間支援組織の手法そのままです。また、日常的には、グループにもちこまれるさまざまな支援要請について、自分たちの仲間で適宜マッチングとコーディネーションをこなしています。その様子は、専門のボランティア・コーディネーターの仕事ぶりともまったく同じです。

ボランティアグループやNPOは、自身の活動経験がそのまま他の組織にとってのモデルとして参考になることから、意図的に中間支援を行おうとしなくても、相談相手として・つなぎ役として、あるいは経験談の提供者として話をするだけでもその機能を果たしているわけです。

III

プログラム案



委員会での議論、ヒアリングの成果などをもとに、退職世代をターゲットとしたプログラム案を提示します。

それぞれのプログラム案は、いくつか異なった特徴を備えていますが、共通することは、地域のさまざまな組織や主体による協働を大切にしていること、当事者の気持ちや自主性を尊重し、当事者自身の参画も得ながら、ひとつのことでおわずに、先々まで楽しく展開していくことができることを念頭においていること、などです。

今回、プログラム案には、あえて、たとえば、認知症のお年寄りのいる家族への支援、とか不登校の子どものいる家族への支援、あるいは、ワーキングプアといわれる人たちが、アディクションの人たちなど、福祉的ニーズが高い、あるいは制度の狭間にあってさまざまなボランティアな支援が必要、という人たちへのかかわり、といった内容のものはあまり含めませんでした。また、よくみられるエコ活動や、国際交流活動なども含まれていません。

退職世代の人たちが、自らのこれまでの生き方を見つめなおし、さらに、自らが楽しめたり、目標をもちやすく、かつ、ある程度先のゴールがみえやすい活動を中心に提案しました。まずは、自分たちの社会における立ち位置や、社会的存在としての自らの大切さを実感することから、よりハードルの高い活動へと関心がむいていけばよいのではないだろうか、という考え方が前提にあります。

プログラムのパーツパーツは、必ずしも目新しいものではないように思われるかもしれませんが、退職世代の人たちが、「自分ごと」としてとらえてもらえるテーマや、すんなり気持ちが入るテーマ、多世代交流もできるテーマなどに配慮し、総合的なビジョンのある構想になるように心がけました。また、プログラムタイトルは、できるだけ格好よく、キャッチーであるよう試みています。

なかには、かなり多彩なメニュー案を提示しているものもありますが、それらも、一度に一気に実施するのではなく、段階をふみながら、積み上げていくことを前提にしています。ただ、段階をふむにしても、全体像や、先のビジョンをもって実施していくことが大切であることから、いろいろな要素を考慮にいれた展開案を提示しているのです。

プログラムメニューは、いろいろな条件の組み合わせや展開方法、ゴールのバリエーションなどを考え合わせていけば、無限といっているほど、創り出すことができるものでしょう。

今回提示させていただいたプログラム案の考え方を参考に、自分たちの地域の特性、利用可能な資源、特色ある人材、地域に必要とされることや地域の関心事などを勘案して、自由闊達に展開し、独自のプログラム案をぜひ企画してみてください。



私の暮らし 5年後 10年後 20年後

自分を見つめ 地域を知り 地球を思う

退職世代の人たちは社会人となって数十年。家族のため、自分のためと動き続け、いざ退職を目前に、地域のこと知らない、これといった趣味もない、これからの暮らしへのイメージもないことに気づき、愕然としてしまう。自分や家族の**5年後、10年後、20年後**を意識し、どのような生活にしたいのか、暮らしやすい地域とはどのようなものか、それにはなにが課題で自分がどのようにかかわることができるのか、じっくり考えてみる機会を提供することから、退職世代が地域に根をおろし、さまざまな活動にも参加しながら、社会をよくする主体者として変身するサポートをする。



5年後 10年後 20年後
60歳で定年を迎えるとして、65歳、70歳、80歳あたりを節目に、自分のみならず、家族や身内の生活に転換が起こりうることを想定し、自分やその周りの環境がどのように変わっているか、ポジティブなイメージ、ネガティブなイメージなど、いくつかのパターンを思い描いてみることで、自分のこれからの生き方に必要なことを考えていく。基本的な健康づくりや経済的なことなどについてはライフプランセミナーなどでふれられていることを前提に、もう少し、自分と社会とのつながり方、自分と街の関係、自分と社会にあるサービスやプログラムなどとの関係などの側面からときほくしていく。



運営委員会
社協等が仕掛けをするにしても、実質的な企画やプログラム運営は、協働組織である運営委員会が行うことが望ましい。承認委員会ではなく、メンバー一人ひとりが主体的にかかわり、具体的な企画案の提案や、実施計画の策定ができるような人選も鍵。当事者参加も忘れずに。

プログラムの目的	退職前後の世代の人たちが、自分や家族の将来の暮らしをみすえ、地域でどのような暮らしを営むのか、地域にどのような活動が必要か、自分はどのようにかかわることができるのか、考えるきっかけを提供し、そこから地域への関心と関与を深めてもらい、仲間づくりや、活動グループ化をすすめる、あるいは活動者への変身を促す。
プログラム計画の経緯・背景・前提	退職世代前後の人たちのなかには、ライフプランセミナーや地域デビュープログラムなどは参加してきているが、その後、具体的な活動や方向性をもちあぐねている人たちがいる。彼らが、地域でより生き生きとして暮らすには、まずは、あらためて、自分のこれからの生き方や地域のあり方へのイメージをふくらませ、 自分ごととして 懸念や不安、課題などを自覚することが必要なのではないか？ 講座やワークショップ、イベント参加、フィールドトリップなどをとおして、具体的なテーマを通じて考える機会をもつことによりさまざまな事象を「自分ごと」としてとらえ、次のステップにつなげることができるのではないか？
運営主体	社協／社協VCを中心にした 運営委員会
運営・実施組織の構成メンバー	社協／社協VC職員、退職前後世代の人たち（特に男性）、住民参加型在宅福祉サービス組織のメンバー、まちづくり系NPOなど
参加者・対象者	退職前後世代の人（なかでも、すでにライフプランセミナーや、デビュープログラムに参加はしたものの、具体的な活動には至らなかつたり、目標設定ができなかつた人たちを念頭に） 主として男性を想定しているが、プログラムによっては、夫婦参加、親子参加など、多世代の人の参加もあり

具体的な事業内容	<p>1. 運営委員会の形成</p> <p>* 社協／社協VCが呼びかけ人となって、事業趣旨を公告し、メンバーを公募。一部、キーになるメンバーは1本釣りも。</p> <p>2. 運営委員会の開催</p> <p>* 事業の方向性についての協議、プログラム内容の協議・計画づくり、具体的な実施計画づくり、</p> <p>3. プログラムの実施・展開</p> <p>たとえば：講座・ワークショップ・フィールドトリップなどを通じて</p> <p>1) 自分と家族の5年後、10年後、20年後をイメージする</p> <p>* 健康、親の介護、子どもたちの自立／結婚、暮らし方、配偶者の病気や死 などのテーマのもと</p> <p>2) 自分がこれから長く住むことになる街がこれからどのような街になってほしいか？ イメージをふくらませる</p> <p>* 自分や家族の5年後、10年後、20年後のイメージに即して、どのような街であってほしいか、どのようなサービスや制度があってほしいか、それには、どのような課題があり、何が不足しているか、それらを充足するには、どのような取り組みが必要か、自分はどうにかかわれるか、考えてみる。</p> <p>3) 自分の街の現状を知る</p> <p>* 2) の課題とこれからの取り組みを考えるには、現状を知る必要がある。</p> <p>* 医療、介護、行政サービス、街なみ、環境、歴史や文化など、いろいろな側面から、今の街の姿をみている。サービス提供団体やNPO、活動をしている人、研究している人、などから話を聞くなどする。</p>
----------	--

Example

自分ごととして考える課題

たとえば：

親の介護をどうする？
在宅？ 高齢者ホーム？ 病院？ ホスピス？ ヘルパーさんはどうやって頼むの？ 認知症になったらどこに相談するの？ 医療費が高額で払えそうにないときはどうするの？ 在宅ホスピスほどのぐらい浸透しているの？ 高齢者グループホームほどのぐらい地域にあるの？ 病気になったとき、往診してくれるドクターはいるの？ 手すりはどうやってつけるの？ 車イスはどうやって入手するの？

災害対策はどうなっているのかな？
避難警報とか避難指示は誰がだすの？ 避難所ってどこにできるの？ 被災ってなに？ 災害ダイヤルってどうやって使うの？ 近くで災害がおきたとき、ボランティアをしたいのだけど？ 緊急のとき、お隣の寝たきりのおばあさんをどうやって支援したらいい？



講座・ワークショップ・フィールドトリップ

自分ひとりではうまく考えられないし、発想が限られてしまいがち。多様な参加者とともに、いろいろな刺激をうけながら、整理していくことが大切。また、街歩きや施設訪問は、仲間や指南役とともに行うことで、見えてくるものが自ずと異なるはず。参加者募集時には、そのようなメリットを前面にだしたいもの。

<p>具体的な事業内容 (続き)</p>	<p>→困ったとき、サービスを受けたいとき、相談を受けてくれるのはどこの誰？ →さまざまな社会的な困難に手助けをしてくれるのはどこの誰？ →自分の街の素敵なところ・うりはなに？ *街歩きをして、街の姿を知る、憩いの場を知る、医療機関や福祉施設を知る、文化施設や歴史的な価値を知る、子どものいる場所を知る、災害時の危険スポットを知る、など *公共機関や、NPOなどを訪問して、施設見学やディスカッションをする</p> <p>4) 街や地域をよくしていくには、これからなにか必要か考える *既存のものをどう充実？ *新規にどのようなことが必要？ *かんたんにできること むずかしいこと それぞれに分類してみると？ *私ができること やりたいことは？ *自治体や市長、社協などにむけて提案をつくってみる？</p> <p>5) これから自分はどうするか宣言する *講座参加者内での発表 あるいは、文集をつくってみる など</p> <p>6) グループ化or既存グループへのつなぎ あるいは、第2シリーズの企画 *参加者の様子や意向をくみながら、次のステップへの橋渡しをする。</p>
<p>協働相手・サポーター リクルートする相手 必要な資源 など</p>	<p>すでに活動に携わっている退職世代の男性、さまざまなNPOのスタッフ、ワークショップ・ファシリテーター、自治体職員、郷土史研究者、地元商店会や地元企業、医師会、看護協会、介護福祉士会、社会福祉士会、法律家、まちづくり系組織、学校、大学生、地元での社会的な活動に関心のある宗教関係者 講座運営、フィールドトリップなどの会場や資金</p>

<p>中間支援組織に 期待されること・役割 など</p>	<p>運営委員会が形成されるまでの、基本構想の発案、メンバーのリクルート、運営委員会発足支援 運営委員会形成後：メンバーのサポート、フォロー、リスクマネジメント 活動に必要な資金調達あるいは資金情報の収集 関係機関との連絡調整・仲介 講座から活動へのつなぎのファシリテート</p>
<p>事業推進の 留意点</p>	<p>運営委員会を実質的に支える、当事者によるコアメンバーのリクルートが鍵になる。 当事者主体の運営を尊重する。 講座に参加することで、先々に希望がもてそう、先が開けそう、というメッセージをきちんと出す。 主として退職男性をターゲットにしつつ、場面場面で、夫婦参加や多世代の人が参加し、交流できるプログラムを組み込む。</p>
<p>この事業の「うり」 期待される効果</p>	<p>運営委員会を当事者中心にすることで、当事者性の高い、リアリティのある活動になりえる。 自分ごととして地域の課題をとらえることで、活動への一歩がふみだしやすい。 多世代の交流が自然にできるプログラムとすることで、地域の顔見知りを増やし、地域人としての感覚を素直にもつことができる。</p>

プログラム案
2

地球の恩をいただきながら暮らす

生老病死 冠婚葬祭からこれからの人生を考える

歴史や伝統に裏打ちされ、人が集まりやすく、地域に根づいている寺院・神社・教会等の特性を活かし、これらの施設を開かれた地域のコミュニティセンターとして、活用。退職世代に生と死をみつめ、自らの人生を考える機会を提供するとともに、季節の行事などへの参画を通じて、自然の恵みを実感し、地球の恩をいただきながら暮らしていることへの感謝をしながら、地域社会におかえしをしていく道を探る。

親子で考える結婚式
退職者世代は息子・娘が結婚年齢にあたる場合が多く、結婚式のもち方は大きな関心の的である。地元の宗教施設などの協力を得て、親子参加によるイベントを開催し、それぞれのスタイルの結婚式の比較検討を行ったり、新たな家庭を築いていくための心構えや地域のかかわりなどについて、ともに考えていく場を設定する。

季節行事
五節句など、さまざまな季節行事、まつりなどの実施を通じて、地域の歴史や文化、自然の恵みや先人の知恵などに触れ、地域への愛着を深める機会とする。イベントは、地域のさまざまなグループや組織、商店や企業、寺や教会、神社などの宗教施設などの協力を得て行い、多世代の多様な人びとが参加できる組み立てとする。

Example
季節行事
正月、節分、ひな祭り、観桜会、端午の節句、七夕、花火、紅葉狩り、雪まつりなど
寺などの敷地内にある季節の恵みをいただく会
・たけのご堀り
・梅、さくらんぼ、桃、杏、イチゴ、いちじく、栗、銀杏 しいの実 など
宗教施設の文化性を楽しむ
・ゴスペルクワイア、声明、お念仏、写経、除夜の鐘つき など
「市」で交流
行事の際には、「市」をたて、地元の商店の出店、NPOの活動紹介ブースや出店、地元の芸能・演芸披露、地元の製品の販売、地元の手芸グループなどの作品展示、写真展なども開催。

プログラムの目的	退職世代の関心事である、身内、あるいは自らの冠婚葬祭を切り口に、自らの人生を考えるとともに、地域社会においての自らの役割を考えるきっかけとする。
プログラム計画の経緯・背景・前提	今までの生き方を見つめ直し、人生の残り時間を考え、知人の死等も数多く経験し、身内の暮らしにも大きな変化が生じる時期にある退職世代。世の中の真理に触れたい欲求とともに、自らの存在価値の確認も求めている。地域社会に根づいた寺院・神社・教会等は、生と死をみつめなおす場、自らの存在意義を考えることができる場を提供できるとともに、地域に開かれた公共施設として、地域イベントへの協力や多世代参加のプログラム実施に大きな役割を果たせる可能性をもっている。
運営主体	下記人材による新たな組織（運営委員会あるいはNPOなど）
運営・実施組織の構成メンバー	社会福祉協議会、環境・青少年活動にかかわる団体、女性団体、社会性溢れる活動的な宗教関係者、歴史や文化に詳しい地域の人、知的好奇心の高い退職世代
参加者・対象者	退職世代と家族、高齢者、子ども、地域の人一般
具体的な事業内容	1. 企画会議 <ul style="list-style-type: none"> 誰のために、どのようなプログラムを展開するか、コンセプトをつくる 具体的なプログラムと実施計画を作成する プログラムの実施・マネジメント 2. プログラムの例 ① 親子で考える結婚式 ② 季節行事の実施 ③ 死への準備教育
協働相手・サポーターリクルートする相手 必要な資源 など	子ども会、地元商店会、商工会、青年会議所、伝統文化継承活動組織、町内会、超宗派地域宗教者会、若手宗教者の会、護持会、氏子会、信者会、結婚式会場関係者、ゴスペル・アカペラサークル、陶芸グループ、写真サークル（記録と遺影撮影）、生花業組合（生花祭壇やアレンジメント協力）、本堂・本殿・礼拝堂等施設、境内等敷地全般

中間支援組織に期待されること・役割など	プラットフォーム組織を形成するまでの、基本的構想提案、関係者への参加打診、組織化（特に社会性溢れる活動的な宗教関係者のリクルートや知的好奇心の高い退職世代のメンバーなど、これまで地域活動やボランティア・市民活動にあまり縁のなかった人たちがメンバーの中核になるように仕掛ける） プログラムやイベント実施時に協力してくれるボランティアやNPO、地元の企業や商店、専門職組織などとの連絡調整、プログラムやイベント周知等への協力
事業推進の留意点	宗教施設や関係者の関与にあたっては、憲法の政教分離の原則に抵触しない配慮が必要。布教や勧誘ではなく、地域のコミュニティセンターとして地域福祉の向上への貢献を主眼とする姿勢を明確に示す。 あくまでも市民主体の運営になるよう、また、宗教関係者も地域の一資源として入りやすい雰囲気をつくれるよう、実行組織のメンバーになる中間支援団体のスタッフによる特段の配慮が必要。
この事業の「うり」期待される効果	冠婚葬祭や年中行事を通して伝統文化を知り、地域への愛着を高めるとともに、地域社会において自らが果たすことができる役割を自覚できる。 生老病死を実感し、特に死を身近に捉えることで、今ある生命や家族の尊さを再認識するとともに、感謝の気持ちや相手を思いやる心を喚起することになり、身近な活動への関心を高めることができる。 特に退職世代の人たちにとって切実な身内のことがらを切り口に、地域の資源や人材、活動などに触れる機会をつくることから、自然と地域にかかわりをもつことができるようになる。

死への準備教育
自分の死や家族を失うことについて、イメージをしっかりともち、自分として、どのように旅立ちたいか、あるいは、家族を見送るときにはどのようなことができるか、考える場を提供する。死をみつめることから、生の有難さを実感するとともに、よりよく生きるこの意味を考える。

Example
死への準備教育のプログラム例
1) 模擬葬儀

- 遺影撮影会
- オリジナル骨壺・豪華棺の展示
- 死出の衣装を考える
- 自分らしい葬儀のスタイルを考える

 など
 2) 死後の不安の軽減

- 保険や香典の扱い方
- 遺産相続
- グリーフケア
- ペットの行く末
- お墓のこと

 など

プログラム案
3

夕陽に向かって走れ！ みんなで挑戦 ホノルルマラソン！

大好きな人と一緒に 今からつくろう 遅筋繊維

退職後、地域で第二の人生をスムーズにスタートするため、昨今関心の高いマラソンをツールに、退職前から心と身体と仲間づくりの準備を始められるようにする。「ホノルルマラソン」というモチベーションをもちやすい目標設定のなかで、誰と一緒にゴールを切りたいかを考え、目標達成のプロセスを考えることで、周囲にいる大切な人の存在を意識し、また地域での暮らし方に目をむけることにもなる。

ホノルルマラソン
●主催/
HONOLULU MARATHON ASSOCIATION
●特別協賛/日本航空
市民が参加できる開かれたマラソンとして人気が高い。日本人の参加者も多い。2007年12月の大会は35回目。目標を大きくたてることでやる気を高める。

遅筋繊維
人の筋肉の繊維は、速筋繊維と遅筋繊維の2種類に大別できる。この遅筋繊維は、酸素を効率よく使うことで長時間に渡ってエネルギーを作り続けることができる筋肉。

主として退職前の人
継続への布石として夫婦参加や親子参加を推奨。

プログラムの目的	「ホノルルマラソン参加」という大きな目標を設定し、退職前から地域の仲間と準備を重ねるうちに、健康づくりのみならず、地域人としての自覚と問題意識、活動意欲を醸成する。
プログラム計画の経緯・背景・前提	東京マラソンをはじめ、全国的に市民マラソンブームであるが、退職時に42.195kmを完走するには、基礎体力の増強、遅筋繊維づくりなどの身体づくりに、退職前からの準備が不可欠である。また、目標達成には同行者が鍵となる。夫婦・親子・親友・地域の仲間などと、励ましあい練習を重ねるうちに、絆が深まると同時に、地域の人や地球の状況等について知ることになることから、新たな地域活動の担い手養成につながることを伏線としている。
運営主体	〇〇社協を中心とした運営委員会
運営・実施組織の構成メンバー	社協職員、マラソン指導ボランティア、体育協会、旅行会社、商工会議所（商工会）、教員委員会生涯教育課、保健師、管理栄養士、定年退職者の退職後教育を考えている企業
参加者・対象者	地域の主として退職前の人（ただしホノルルマラソンをめざす人なら誰でもよい）
具体的な事業内容	1. 運営委員会によるマネジメント ・ 運営委員への趣旨説明・協力依頼 ・ 要綱・実施計画、運営体制などの協議・決定 ・ 参加者募集・プログラム運営・マネジメント 2. プログラム実施（2年間かけて以下のようなことを行う） A. ホノルルマラソンで走るための 基礎講座 1) マラソンに挑戦しよう ・ 経験者や専門家の話を聞き、基礎知識を身につける 2) 地域人になろう ・ 退職後の自分の暮らしを考え、プログラム参加への意義をみいだす 3)トラックで走ってみよう（実践編） ・ 自分の限界を知り、今後の練習方法にアドバイスを受ける/ ペースメーカー の利用方法など、マラソンのツボを学ぶ

具体的な事業内容（続き）	4)ホノルルマラソンに参加するための 旅行講座 ・ 実践的な準備などについて学ぶ B. 資金づくりのために仲間フリーマーケット参加 C. 定期的に記録会などを開催 ・ どれだけ走れるようになったか、身体づくりはどうか、専門家のアドバイスを受けながら、今後の練習方法を調整する機会とする 1)ミニ記録会 2) プレ大会 （1年前に 駅伝方式 で） 3. 2年後いざホノルルマラソンへ！（ここで達成感を！） 4. 自分、妻、子どもや仲間と地域活動をこれからも…
協働相手・サポーター リクルートする相手 必要な資源 など	体育協会、マラソン指導者（中学校・高校など）、現役マラソン選手、スポーツドクター、旅行会社、商工会議所（商工会）、スポーツ用品店、企業等、金融機関、行政関係（教育委員会生涯教育課、保健師、管理栄養士）
中間支援組織に期待されること・役割 など	退職世代に肩書きが無くなる暮らしについて意識化してもらい、地域活動への参加を自発的に行えるよう、地域課題や問題点などを提起していく。また、仕事人間から地域人間になれるよう情報提供する。 何年か後には、まちおこしマラソン大会や障害のある人とともに走るマラソン大会などの活動にも広げられるよう展開していく。
事業推進の留意点	まずは楽しむことと健康を考えて気軽に始めてもらえるよう仲間づくりを意識して行なうなかでさりげなく問題提起をしていく。 リスクマネジメントや継続支援も大切。
この事業の「うり」 期待される効果	メタボ対策・健康増進・仲間づくり、家庭の絆を強める、地域を知ることなどが「ホノルルマラソン」というひとつのゴールの下で達成できる。 「マラソンを走り切ることができた」という達成感を糧に、退職後の人生をゆたかなものにし、地域活動の担い手としての自覚も促すことができる。 専門家が介在することにより、安全に効率よく健康づくり体力づくりをすすめることができる

基礎講座
マラソン参加までのプロセスを身体づくり、絆づくり、経験の蓄積、具体化のための準備などの側面から明らかにして、やる気を高める。

Example
たとえば：
*ホノルルマラソン経験者の話を聞く
*マラソンを始めるためのイロハ（走り方の注意点、靴選び、ユニホームの選び方など）
*あなたの基礎体力年齢を知ろう？（体力測定、健康診断は必須）
*マラソンランナーの食について学ぼう（燃費のよい身体づくりのための栄養指導、めざせ脱メタボ！など）
など

ペースメーカー
好記録を出しやすくするために中盤までレースを先導するランナーのこと。

Example
実践的旅行講座
・ バスポートをとる
・ 参加者や旅行行程の見通しをたてる
・ ホノルルについて知る
など

プレ大会/駅伝方式
マラソンは一人で走るものであるが、駅伝方式の練習で仲間とたすきをつなぐなかから、連帯感や絆を強め、目標にむかって一緒にがんばる気持ちを高める。

プログラム案
4

コミュニティ・デジカメマン

撮って発見 私の町の名所 有名人

「趣味活動が社会貢献になる」これは「楽しく」「無理なく」活動したいと考える退職世代にとっては魅力的なスタートではないだろうか。この企画は、写真というツールを利用して、退職世代が地域や地域の人びとを知るきっかけづくり、退職世代と多世代交流、ひいては福祉現場や地域とのつながりを強めていくことをめざしている。

余暇教育

子どもたちは、塾や部活などに忙しい。大人と一緒に写真を撮ったり、作業にかかわることによって、関心の幅を広げていく機会となる。

Example

プロジェクト例

- ① 資料館・博物館の収蔵品撮影
- ② 作業所の商品撮影
- ③ 町の名所・旧跡撮影
- ④ 町の観光ガイドづくり
- ⑤ 町の防災マップづくり
- ⑥ 町の四季撮影
- ⑦ 地元公園マップづくり
- ⑧ 元気な100歳（高齢者）写真展
- ⑨ 年男・年女写真展
- ⑩ あなたの家族写真撮ります！プロジェクト
・多世代の人のふれあいの機会づくりに
- ⑪ あなたの遺影を撮ります！プロジェクト

振りかえり会

どのような企画も、振りかえりを行うことによってはじめて終了することができる。達成度の確認、自己尊厳の確認としても大切。この場から新たなプログラム展開やグループ化など、次のステップがつけられる可能性もある。

プログラムの目的	写真という趣味活動を通じて地域での多世代交流をすすめながら、若者世代と退職世代と一緒に、住んでいる地域の魅力に出会う。 趣味活動からボランティア活動のきっかけをつくる
プログラム計画の経緯・背景・前提	趣味を人に役立てて、評価してもらいたいという気持ちはどの世代にも共通である。一方、人格形成期の小・中学生、若者にとって、新しい趣味に出会うことは、 余暇教育 としても意味がある。写真技術講座に地元を再発見するような撮影ツアーを組み合わせ、共同作業を通じた新たな多世代交流・相互理解をすすめ、地域へのかかわりを深めていくねらいをもつ。
運営主体	ボランティアセンターを仕掛人とする運営委員会
運営・実施組織の構成メンバー	社協職員、退職世代、小学生・中学生（児童館などの利用者）、中学・高校教員、大学生、施設職員、施設ボランティア、新聞社写真サークルメンバー、地元のカメラマン
参加者・対象者	退職世代、小学生、中学生、大学生、幼児親子、成人
具体的な事業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 運営委員会開催 <ul style="list-style-type: none"> ・共同作業の内容、写真講座のテーマ、講師、スケジュールの大枠決め、プログラムの広報、募集、運営 2. 参加者ミーティング／撮影プロジェクトの決定 <ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じてグループ分け 3. 写真講座（座学と実技）の実施 4. フィールドワーク（撮影会） 5. 写真展等発表会の開催 6. プロジェクト振りかえり会、発表会振りかえり会 <ul style="list-style-type: none"> ・関連活動団体の紹介（写真サークル、ボランティア活動等）やグループ化（既存のグループ外で今後も活動を継続したい人たちで）

協働する相手 サポーター 協力者 リクルートする相手 必要な資源 など	テーマ分野の講師、写真講師、警察署、消防署、観光協会、郷土史会、児童館、撮影に同意してくれる町の人、各世代の牽引役になってくれる人、グループワークをする場所、写真展開催会場、写真展開催に必要な費用
中間支援組織に期待されること・役割 など	地域内施設との協働（博物館等施設、地域センター等人が集まる場所、作業所など）のための根まわし 写真撮影ボランティアが必要とされている場の情報収集 行政や観光協会などの根まわし プログラムの広報、参加者募集、リスクマネジメント
事業推進の留意点	広報展開時に「何か学べる」「楽しそう」というポイントを前面に出す。 運営委員会やフィールドワークは退職前世代や子どもたちの参加を念頭に置き、参加しやすい時間・曜日に（土日の昼間等）実施する。 講座参加者と関係施設などを丁寧につないでいき、今後の活動の可能性を残す。 ボランティア活動として継続した場合のフォローアップを丁寧に行う。
この事業の「うり」 期待される効果	趣味活動は年齢に関係なく、共通の話題としてのコミュニケーションが成立しやすい。特に、男性は会話だけでコミュニケーションをとることは苦手で、むしろ何らかの活動が間に介在することが、人つなぎのポイントにもなる。郷土再発見や町の防災マップづくり、撮影ボランティアなどの活動を一緒にすることを通して、今まで出会わなかった世代同士の交流がスタートできる。 交流をてがかりに、写真サークルやボランティアサークルなどの形成を促し、継続的なつながりの可能性を広げる。

Example

写真講座

写真は撮る対象によって異なる撮り方にコツや留意点があるので、そのポイントをひとつおしり解説。そのことによって写真のクオリティが俄然変わる楽しみを体感してもらおうと、さらに継続へのはすみがつく。

Example

写真講座テーマ例

- ・物体撮影のポイント
 - ・風景写真のポイント
 - ・HPにアップするときのポイント
 - ・テーマについてのウンチク講座
 - ・人物写真のポイント
 - ・インタビュー技術講座
- 人物をより魅力的に撮影するには、撮影者とその人の生き方や人生に触れ、心を通わせることが大事。



立ち上げ！ いのちと地域を守るため！

新しい自主防災グループで災害に強いまちづくりを

退職前後世代を主対象にした防災・減災・災害ボランティア講座の開催を足がかりに中核メンバーを養成し、グループ化。その発展形として地域内に自主防災グループを結成したり、継続的な講座開催もグループですすめられるようにする。防災・減災教育を地域のさまざまな層にいきとどくようにし、地域の防災意識を高め、人と人の結びつきが自らを助くことに気づく。

ハイゼックス袋
特殊な炊飯袋。外の水在中に通さないで、釜の水が汚くても（プールや川の水）炊飯可能。災害時に少量の水で温かいごはんが食べられる。

**空き缶炊出し
(通称サバめし)**
350ミリ缶2つで炊飯。燃料は牛乳パック。

被災者の苦悩
災害時の支援活動は「被災者中心」が原則。被災者の心の痛みに寄り添う気持ちが重要である。被災者復興支援は人と人の活動なので、マニュアルが必ずしも当てはまるとは限らないことに留意。地域といのちを見つめる、困った時はお互い様、明日は我が身、見返りを求めない、おかげさま、他者の苦しみを他人事にしない、気持ちで、かかわる。

プログラムの目的	「新しい自主防災グループを自ら立ち上げ、生命と地域を守りましょう！」というメッセージをもとに、退職世代を中核とする、新しい自主防災グループを結成し、地域に根づいた防災プログラムの展開を図る。
プログラム計画の経緯・背景・前提	最近頻繁に起こる自然災害は、自分や家族、そして地域の生命と財産、ひいては暮らしそのものや、地域社会に直接的な被害をもたらす可能性をもっている。誰にとっても脅威であり、対応策への関心も高い。災害に強いまちづくりは、日常の地域福祉の向上に直結しており、その過程で、地域（歴史・文化・住んでいる人）を知り、地域での人と人との結びつきの尊さを知る機縁となる。
運営主体	社会福祉協議会が仕掛け、後に自主グループに移行
運営・実施組織の構成メンバー	社協職員、災害ボランティア経験者、民生委員、児童委員、大学生、地元商店、地域に密着した宗教関係者
参加者・対象者	退職世代を中心とした防災に関心のある方、地域住民一般
具体的な事業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 災害ボランティア学習講座の展開 <ol style="list-style-type: none"> 1) 防災・減災・災害ボランティア入門講座の開催 2) さらに関心を深めたい人を対象とするボランティアコーディネーター養成講座の開催 3) 自主防災グループ立ち上げ（ネットワークづくり） 4) シミュレーション型プログラムの実施 <ul style="list-style-type: none"> ・自主防災訓練や防災まち歩き・防災マップづくり（自分たちの街や住む人を知る）、避難所誘導・避難所体験、非常食炊出し（大鍋での調理やハイゼックス袋・空き缶での炊出し）訓練 など 5) 小中高生向け防災学習の企画・運営（長期休みのイベントや総合学習の時間のプログラムとして） 2. 災害ボランティア実践講座 <ol style="list-style-type: none"> 1) 被災地の現状を知る。被害状況だけでなく、被災者の苦悩に思いをいたらせる。 2) 被災地にてボランティア活動に参加する 3) 被災地にてボランティアセンターの運営支援をする

具体的な事業内容（続き）	<ol style="list-style-type: none"> 3. 防災グッズ検証や開発（簡易トイレや非常食、給水袋等災害時必要な物） 4. 家具転倒防止器具取り付けなどの減災活動
協働相手・サポーターリクルートする相手 必要な資源 など	<p>社会福祉協議会、行政、学校、地域の企業・商店、消防団、民生委員・児童委員、自治会関係者、自衛隊OB・警察OB・ボランティア連絡協議会、住民参加型在宅福祉サービス団体、医師、保健師、介護福祉士、看護師、栄養士、カメラマン、イラストや製図ができる人、大工仕事得意な人、災害ボランティア経験者、防災士、飲食店組合、食料品組合</p> <p>寺院・神社・教会等宗教施設</p>
中間支援組織に期待されること・役割 など	<p>当初企画の運営・参加者募集・マネジメント・グループ化・グループサポート、活動資金情報、学校との調整、他関連団体等との連携への促し</p> <p>講師の紹介、災害復興支援に詳しい社協職員やNPOスタッフの紹介、災害関連団体の紹介</p>
事業推進の留意点	<p>地域福祉の向上をめざし、まずは自分たちの街の歴史・文化から、暮らす人びとについて知るとともに街の危険スポットなどを発見・対応等を考える。</p> <p>地域でできることから手掛けていく。</p> <p>災害時の行政による支援策には限界がある現実を知るとともに、自分たちだけで全てを、とまでは意気どまない。</p> <p>講座やイベントには、寸劇・落語・紙芝居等、創作的芸術を取り入れ、わかりやすく伝える。</p> <p>いずれは講座の企画で中核メンバーを中心に講師も自分たちで務められるようにする。</p>
この事業の「うり」 期待される効果	<p>災害は誰の身にも降りかかり得ることであるため、関心度も高く、多世代・多様な人たちの参加がみこまれる。なかでも退職前後世代の男性にとって役割意識や責任感を持ちやすく、地域活動参加へのよい導入になる。</p> <p>講座受講者が数年後には企画や講師を務めることを念頭にすすめるので、発展性とともによりがいを提供できる。</p> <p>子どもへの防災・減災教育を通して、親世代への働きかけもでき、多世代交流の場をつくれる。</p>

宗教施設
大規模災害では、公共施設だけでは避難者を受容しきれない場合もあるので、公益法人である宗教施設が連携するといざという時、心強い。避難所やボランティア受け入れ施設、物資保管所、駐車場、遺体安置所等の受け皿としての可能性は高い。それには日常からのかかわりづくりが欠かせない。

6

あなたも『村宝』になろう！プロジェクト

『村宝』はいわば、地域の便利屋さんであり、地域を支える縁の下の力持ち。地域に暮らす人びとがもつ知識や技術を、助け合いに活かす仕組みをつくることにより、たくさんの『村宝さん』を輩出。支えあいの心を醸成するとともに、特に退職世代などの交流や生きる糧の環境設定をし、地域を活性化させる。テーマを設定した講座の開催からコアメンバーを集め、メンバー自身がグループ化し、活動を開拓していけるようサポートする。

村宝（むらだから）
田舎では、昔から器用な人（たとえば、襷や障子を上手にはれる。電気製品などのちょっとした故障や不具合を修理できる、棚をついたり、手すりをつけたりできる、など）は村宝として重宝されていた。

地域の便利屋さん
自分の特技を活かして、地域のなかで役立つ人。

講座・グループ化
個人の技術力アップにとどまらず、地域で新たな仲間づくりのきっかけとなるような仕掛けをもった講座として企画することが大切。社協のボランティアコーディネーターなどが、参加者の様子をみながら、活動グループを育てていく心づもりで。

交流
自分から入れる人、誘われないと入れない人、人それぞれではあるが、人は1人では生きられない。いろいろなタイプの人と交流できる機会としてこのプロジェクトを活用できるよう、参加者にとって敷居の低いプログラムづくりに留意。

Example
養成講座
たとえば：
家のべんりやさん講座
郷土料理・健康食講座
保育おしいさん講座
伝統行事を見なおそう講座
家具転倒防止器具取り付け講座
昔遊びを見なおそう講座
ギターやりの教室
バンドをやってみよう
など

プログラムの目的	地域に埋もれた知識・技術の活用を通して、助け合い・支えあいの場をつくったり、地域の人たちの交流の場をつくることから、自らが地域の宝として活用される喜びを知る。そのことが地域人としての意識を高め生きる楽しみをつくりだす。
プログラム計画の経緯・背景・前提	退職世代の人たちの知識や技術を地域の人たちのために役立ててもらったり、次世代に伝達してもらおう場づくりの必要性から、社協が中心になって、『村宝』養成講座をかわきりに、活躍の場のコーディネートなどをする。
運営主体	〇〇社協／社協内に実行委員会設置
運営・実施組織の構成メンバー	社協職員、教育委員会関係ボランティア、高校の先生、地域の男性ボランティアグループのリーダー、住民参加型在宅福祉サービス団体のリーダー、福祉施設のOT、地元婦人会
参加者・対象者	地域の主として退職世代（実際は、年齢性別等は問わない）
具体的な事業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 村宝 養成講座 <ul style="list-style-type: none"> * 地元の助っ人として、技術・知識を役立てるための講座 • 技術・知識を、役立てるにあたっての心がまえや留意点、ルール・マナーなどをともに学ぶ • 技術・知識のブラッシュアップをする たとえば：手すりを取りつける際の高さの決め方 * 講座修了時にグループ化のファシリテート 2. 村宝 派遣プロジェクト <ul style="list-style-type: none"> * 手を必要としている町の人や施設などに適切な人材を派遣（無料・状況によっては実費） * 村宝さん自身がグループを結成して、自転できるまでは、実行委員会がコーディネート 3. 村宝 ねぎらいの会 セミナー＋交流会 <ul style="list-style-type: none"> * フォローアップ、スキルアップを兼ねて * モチベーションの持続

具体的な事業内容（続き）	<ol style="list-style-type: none"> 4. 実行委員会企画会議 <ul style="list-style-type: none"> * 講座の企画・手配 * 講座進捗状況の観察とアジャストメント * 村宝さんの派遣コーディネート（自転しだすまで） * 村宝さんのフォローアップ、バックアップ * 反省会と次年度の企画
協働相手・サポーター リクルートする相手 必要な資源 など	助ける人・助けられる人、教える人・教えられる人 つなぐ人、情報提供する人、夢を語る人 資金援助をしてくれる人・企業など 先輩ボランティア経験者 ボランティア・市民活動の意味をやさしい言葉で語れる人 いろいろな得意技をもっている地域の人 OT系で車椅子操作・修理、あるいは自助具や介護用具の作成などを教えられる人
中間支援組織に期待されること・役割など	講座の企画・資金確保、講座の実施、修了者のフォロー、修了者による活動グループ結成のファシリテーター、活動の場の開拓、活動コーディネート、ブラッシュアップセミナーの開催、参加者のバックアップ、リスクマネジメント、PR
事業推進の留意点	『講座』らしさの排除 → 楽しさを演出して敷居を低く 口コミの威力を利用 フォローアップを大切に → 特に、活動の場をコンスタントに提供できること、悩みごと困りごとの相談、リスクマネジメントを丁寧に 一定期間後、グループの運営はメンバーになるべく任せる あくまでも信頼関係にもとづく支え合いであって、「便利に使われている」感がでないよう留意
この事業の「うり」期待される効果	地域の助け合いをシステム化し、支え合いのコミュニティをつくることができる。 有用感をもつことにより、退職世代の生きがいづくりに貢献できる。

生きる糧
これまで仕事を生きる糧にしてきた退職世代の主として男性たちに地域で新たな生きる糧をみいだしてもらうことが目的のひとつ。

地域の活性化
地域内での共助の部分をいかに発展させられるかがポイントとなる。

丁寧なサポートとフォロー
やる気になった人たちがその気持ちを持続して楽しく活動が続けられるよう丁寧なサポートとフォローが必要。グループとしてではなく一人ひとりを大切に。

Example
得意技の持ち主
たとえば：
漬物上手、郷土料理上手、お惣菜上手
大工仕事上手・修理もの上手、電気工事ができる人
介護技術を教えられる人
運転が好きで上手な人
子どもが好きなおじいさん
など

プログラム案
7

学校サポーターになろう！

地域の力で子どもを育てる

退職者世代を中心に小学校の支援者グループ（サポーター）を結成することで、学校および子どもを地域の大人が支える機運と仕組みをつくる。これにより今まで対応しづらかったマンモス校などでの課外活動やきめ細かい授業支援が可能になる。また、**特別支援教育**、多文化理解教育など、学校現場が抱える現在の課題についての理解を深め、子どもが安心して地域の学校へ通える環境の整備にも寄与していく。

特別支援教育
障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、そのもてる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うもの

PTA や親の参加
退職世代がかかわるのみならず、PTA やそのOB など、親の世代が積極的にかかわることが大切。校区内のことがらや人についての関心も高く、知識も豊富なPTAがかかわることで、より実態に即した活動の展開が可能になる。

外部支援者・講師が参加しやすい学年
一般的に学校での支援をはじめるとは中学校よりも小学校、特に3年生や4年生くらいの方が子どもの反応もよく、キャッチボールがしやすいので初心者講師の入り口として適当なのではないかと考えられる。ただし、支援内容や学校の状況に左右されることにも留意。

プログラムの目的	学校生活や学習に困難をかかえる子どもたちへのきめ細かい支援ができる退職世代の活動サポーターを養成することで、今まで教員だけでは不可能だった子ども一人ひとりに配慮した教育プログラムの実践をすすめる。
プログラム計画の経緯・背景・前提	地域の学校には学校生活や学習に困難をかかえる多様な子ども（学習環境に適応が難しい、学習障害がある、身体に障害がある、外国人の子弟など）の通学が増えており、学びの支援・移動支援・安全面での見守り、学校生活を円滑に行うための支援などの強化が急務である。退職世代にとって教育は大きな関心事だが、学校における子どもの支援方法や意義について一定の知識のあるサポーター数は少なく、支援ニーズとのマッチングが難しい状況がある。
運営主体	社会福祉協議会、教育委員会、学校、（いずれは、退職世代ボランティアグループが参加する）協働組織（運営委員会）
運営・実施組織の構成メンバー	社会福祉協議会、教育委員会、学校、地域の人で福祉教育・ボランティア学習実践者、PTA OB
参加者・対象者	学校支援に関心のある退職世代一般（サポーター候補） 学校生活や学習に困難をかかえる子どもたちとその親（含：外国人の親） など
具体的な事業内容	1. 学校支援サポーター入門講座 1) 学習や学校生活に困難のある子どもたちのことを理解する 2) 基本的な学校のスケジュールや仕組みについて知る 3) 子どもたちのサポートの仕方を体験してみる *教室を使って、ワークショップやロールプレイなどを通じてイメージをつかむ 4) 福祉教育・ボランティア学習支援について知る ①「福祉教育・ボランティア学習」の成り立ちや目的・役割、バリエーションなどについて ②サポーターにできること・期待されること 5) 授業参観 *教室での様子を見学／なつかしの給食も体験

具体的な事業内容（続き）	6) 学童保育や児童館などで実習 *子どもとのコミュニケーションのとりかた、サポートの実際を経験してみる 2. 講座修了生によるグループ化／活動の展開 1) 講座終了時に話し合いの場をもち、今後どのようなかわり方をしたいか、参加者の気持ちを確認 2) 運営委員になるコアメンバーの合意をする *彼らが支援プロジェクト全体の企画や教育委員会や学校などとの連絡調整の要となり、実際の活動は、小グループで実施するような仕組みにする（コアメンバーも実働メンバーになる） *活動メニューの柱ごとに小グループを編成し、それぞれが自立的に展開できる仕組みをつくる 一人が複数のグループに所属することもあり
協働相手・サポーターリクルートする相手 必要な資源 など	「福祉教育・ボランティア学習」研究者・実践者、児童館、学童保育所、障害児療育センター等障害児関係の福祉施設、 地元企業や商店 （スポンサー候補）、多文化理解教育関係NPO、国際交流協会
中間支援組織に期待されること・役割 など	基本構想立案、教育委員会・学校等との協議・調整、運営委員会の形成促進、運営委員会の基本的な事務局機能・マネジメント、グループ形成に向けた参加者へのうながし、プロジェクト運営経費等の確保・情報収集、サポーターへの支援・フォロー、リスクマネジメント
事業推進の留意点	学校側の受入体制に留意し、無理せずできることから手掛け、実績を積みながら活動の量やメニューを増やす。 学校教育全般をなんとかしようと思わずに、定期的に活動を振り返ったり、学習支援、福祉教育・ボランティア学習などに関する学びの場を設定し、サポーターのフォロー、モチベーションの維持を図る。
この事業の「うり」 期待される効果	きめ細かな授業や行事へのサポートが可能になり、困難をかかえる子どもたちの育ちを支えることができる。 学校が地域に開かれ、さまざまな人がかかわれる土壌をつくること PTA OBの参加により、世代間交流の促進も期待できる。

Example
活動メニュー
たとえば：
*学校生活や学習に困難をかかえる子どもたちの教室を中心にした支援
*学習に困難をかかえる子どもたちへの、課外学習支援（含：日本語を母語としない子どもたちへの日本語補講や算数など遅れがちな科目の学習指導）
*総合的学習の時間などにおける、福祉教育・ボランティア学習プログラムの企画・運営・協力
*学校行事企画・運営／行事プログラムへの協力
・学校が企画するものの支援にとどまらず、地域の協力も得ながら、自分たちでも行事を企画運営する
*障害児の学童保育
・共働きの親のお迎えまでの預かり、療育支援など
*外国人の親とのコミュニケーション支援
・連絡事項の翻訳、個別相談、日本語教室など

地元企業・商店など
地域密着をうたう事業者にとって地元の学習活動への支援は大きな関心事のはず。講座の経費や実際のプログラムにかかる経費などについて、地元教育を支える観点から支援を要望していただくことを考慮にいれたい。

プログラム案
8

地域孫をたくさんつくろう！

孫に読んであげたい絵本のススメ

核家族化により、退職世代が孫と同居する率が低くなっているなか、絵本の読みきかせをとoshi、地域に心のよりどころをつくとともに、子どもたちの親世代とのつながりを自然につくり、孤立防止にも役に立てる。各家庭での絵本活用を推進することで情緒教育に寄与するとともにリサイクルを通して退職世代と孫世代とその親世代、のかかわり、さらには退職世代と地域のかかわりを促進する。

リサイクル
絵本も洋服も子どもの成長のスピードがはやいため、びったりフィットする期間が短いことから「交換」あるいは「プレゼント」の場（市場）をつくってもっと活用できるようにする。市場を通して、いろいろな人と出会い、つながり、仲間づくりに発展する可能性も。退職世代は、市場の企画・運営、出品物の管理、売り子さんなどとしてかかわりを。

おすすめ絵本
絵本の種類は非常に多く、選ぶのに迷ってしまうこともしばしば。また年齢層や子どもの関心にマッチした絵本でないと、せっかく読み聞かせをしてもおちついて聞いてくれないことも。図書館の司書、保育科や児童文学専攻の学生、子育て中のおかあさんたちのアドバイスなどを受けておすすめ本リストをつくってみることも活動の一環に。

交換用ストック
家から絵本をもってこれなかった子どもも参加できるよう、運営側がストックをもっておく。

プログラムの目的	絵本をキーワードに、退職世代と多世代の交流を促進し、新たな支え合いの人間関係を地域につくとともに、 リサイクル 文化の醸成を図る。
プログラム計画の経緯・背景・前提	コンピュータゲームがはやる昨今、子どもたちの読書の機会が少なくなっている。一方、近年「情緒の安定」など読書の効果が見直されてきている。特に絵本は幼児にとって「想像力を高める」「集中力をつける」などの効果があり、早い段階で絵本に触れることの大切さや、胎児期の親子のコミュニケーションツールとしての有用さについて言及されている。また読み聞かせは、読み手と聞き手の親密な関係性を育むことができ、新たな人間関係構築の格好のツールとなる。
運営主体	子育て支援に取り組む市民団体による運営委員会
運営・実施組織の構成メンバー	子育て支援に取り組む市民団体、社会福祉協議会、絵本指導者、児童館指導員、子育て中のおかあさん、大学生、退職世代の人
参加者・対象者	退職世代、退職世代の家族、子ども、乳幼児をもつ親、小学生・中学生
具体的な事業内容	<ol style="list-style-type: none"> 孫に読んであげたい絵本読み聞かせ講座の開催 <ol style="list-style-type: none"> 「絵本の役割・効果」講義-年代別おすすめ絵本の選び方、絵本のバリエーションの紹介なども 絵本読み聞かせ教室（技術習得） 児童館や小学校で実習 絵本こうかん市場の開催 <ol style="list-style-type: none"> 広く一般より家庭で不要になった絵本を収集し絵本をストック 幼児が絵本を持ち寄り好きな絵本と交換できるイベントを開催 → 常設コーナーの運営に発展 → 絵本の交換から子ども服のリサイクル市にも発展

地域孫
自分の血縁の孫だけではなく、地域のオチビさんはみんな孫ととらえ、子どもを地域で育てようという考え方。里孫ということばが使われる場合も。

読み聞かせの技術
絵本の読み聞かせは、読む人と聞く人と絵本があれば誰でもすぐできること。一方で「上手な」読み手の語り口には、思わず大人も感情移入して聞きいってしまう。絵本を読み聞かせる時のちょっとしたコツやポイントを学ぶことによって読み手としてグレードアップし、「おじいちゃん、絵本読んで〜」としよっちゃん孫にせがまれるようになるのがひとつの目標に。

具体的な事業内容（続き）	<ol style="list-style-type: none"> 交換会場にきた子どもを対象に読み聞かせを実施 <ul style="list-style-type: none"> *読み聞かせイベントを地域のいろいろな施設や場で開催（例：砂浜、神社の境内、古民家の庭、お座敷電車、博物館の展示物の前 など） 地域の民話の収集 <ul style="list-style-type: none"> *口伝のお話を絵本化して語り継ぐ活動に発展 絵本づくりワークショップ <ul style="list-style-type: none"> *退職世代と子どもがペアでオリジナルストーリーをつくるイベント開催など
協働相手・サポーター リクルートする相手 必要な資源 など	児童館、保育士、幼児教育科をもつ大学など、子育て支援NPO、司書、地元商店（スポンサーとして） 語り部養成講座の講師、郷土の民話収集家、演劇・人形劇などの関係者 地元のイラストレーター・画家・デザイナー、画材店 絵本（交換用ストック）、ストック用絵本倉庫
中間支援組織に期待されること・役割 など	参加者募集の広報、子育て関係機関の紹介 関係機関との連絡調整 絵本のストック場の確保 イベント会場などの手配 協力者・講師などの情報収集 寄贈図書の手配
事業推進の留意点	「孫に読んであげたい」をテーマにしてはいるが孫がいなくても参加者できること、むしろ、地域の子どもたちとのつながりづくりに主眼があることを明確にうたうこと。おすすめ絵本のセレクトが重要な鍵になる。
この事業の「うり」 期待される効果	自分の孫に何かしてあげたい、より広い意味で子どもたちに何かを伝えたいという気持ちを形にすることができる。絵本こうかん市場を通じてリサイクルへの取り組みが推進できるなど、いろいろなバリエーションのある活動につなげたり展開したりできる。

プログラム案
9

ヘルシー料理をつかってふるまおう！ もてなしの心がしみる塩梅の粋 メタボも撃退！

鍋料理などかんたんにできて、みんなで食べることで仲間づくりができるメニューを「**メタボリックシンドローム対策**」と併せて学び習得する。習得したメニューで障害のある人たちのグループホーム利用者などにふるまう機会をつくる。そのことを通じて地域の施設と退職世代の交流を進め、退職世代を地域の支え合いの一翼を担う人材に変身させていく。また、料理習得の過程で退職世代が自分自身や家族の健康管理を意識した暮らしを自らつくっていきけるようにする。

ヘルシー料理をふるまおう

自分のために料理する気にはならなくても、人さまのため、喜んでくれる相手のためならば腕を磨く気にもなるもの。自分と相手の健康に配慮した料理を習得してふるまうことで自らの健康と生きる糧を手に入れよう、というねらい

メタボリックシンドローム

高コレステロールに匹敵する強力な危険因子として、近年、世界的に注目されているが、正しく理解している人はどのくらいいるだろうか？退職世代はなかなか食生活を改善できないでいるが、同じ悩み（気がかり）を抱えた者同士できちんと学び対策を講じることで効果があるかも。

Example

料理教室でやってみる

- ①メタボリック症候群解説（健康管理の視点から）
- ②食品衛生について
- ③おもてなしの心を共有する…懐石料理のいわれなど
- ④料理の基礎・素材の知識・道具の知識など
- ⑤中高年者向けメニューの調理実習
- ⑥豆腐づくりなど最近では買うことが前提となった食材の作成にも取り組む（食の安全を考える）

プログラムの目的	自分のためにも誰かのためにもなる料理づくりを学ぶことで自分の暮らしと地域の接点をつくり、仲間づくりと地域貢献に資するプログラム参加が無理なくできるようにする。
プログラム計画の経緯・背景・前提	料理がうまくなるコツは食べてもらう相手をイメージできるかどうかにかかっている。自分のために料理を覚えるだけではなく、家族や友人など食事をふるまいたい相手のことをイメージしながらメニューを考え調理をすることが上達につながる。 障害のある人たちの福祉施設やグループホームなどでは利用者の高齢化が特に小規模なところですから、食事からの健康管理も大切になっている。 これらの要素を組みあわせ、退職世代が料理を通じて地域に仲間をつくり地域社会に貢献できる仕掛けをつくる。
運営主体	社会福祉協議会や管理栄養士、調理師などによる実行委員会運営からグループによる自主運営へ移行する
運営・実施組織の構成メンバー	障害者グループホーム、ボランティアセンター 管理栄養士、調理師、OT、退職世代向料理教室経験者
参加者・対象者	退職前後の世代の男性、健康に気をつかう中・高年男性、グループホームに暮らす、あるいは在宅で一人暮らしの障害のある人
具体的な事業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 料理教室 2. グループホーム利用者とのミニ交流会 <ol style="list-style-type: none"> 1) ヒアリング調査 <ul style="list-style-type: none"> ・調査を通じて食の嗜好を調査する 2) メニューの選定 <ul style="list-style-type: none"> ・メニューを参加者で話し合い決める ・参加者の健康状態（含：アレルギーやそしゃく力）や、食べる際に必要な配慮（食べ物の形状・柔らかさ・自助具や介助の要不要など）を確認 3. 交流食事会（年4回、季節ごとに） <ol style="list-style-type: none"> 1) 近隣の障害者グループホームでの食事会の開催 <ul style="list-style-type: none"> ・買い物はグループホームのメンバーと一緒に

具体的な事業内容（続き）	<ul style="list-style-type: none"> ・地産地消やごみの出ない調理法を考慮 ・食物アレルギーに関する知識の習得もこのころに <p>4. グループ化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交流会を数回行ってからメンバーのグループ化をすすめ、自主運営に切り替えていく ・外出企画と併せて、お弁当の考案、在宅の障害のある人たちや高齢者を招待する食事会などの企画にも発展
協働相手・サポーター リクルートする相手 必要な資源 など	グループホーム、グループホーム世話人、地元飲食店、飲食店勤務経験のある方 調理器具、公共施設や企業などの調理スペース 地元商店街や小売市場（ 対面販売の店舗 ／食材等の供与）
中間支援組織に期待されること・役割など	プログラムの企画・運営・PR・参加者募集・マネジメント グループホームなど活動先とのコーディネート 運営主体となるメンバーのグループ化の促進 関係機関やプログラム実施場所との連絡調整・法律関係のクリア、リスクマネジメント
事業推進の留意点	衛生に関する意識の徹底と管理をする。 グループホームなどで実施する際には、 交流に資することのできるメニュー （鍋料理、鉄板焼き、たこ焼き、オープンサンド、手巻き寿司、懐石料理など）を考慮すると同時にバリアフリー（食べやすさ、介助の確保など）にも配慮する。
この事業の「うり」 期待される効果	「男の料理教室は」多々あるが、誰かに料理をふるまう時に必要な「相手のことを知る」「相手の気持ちやリクエストを思いやる」環境をつくるため、地域における障害者の暮らしにふれ、交流の場をもつことで、地域の支え合いの一員に自然になっていく。 食事をふるまう相手の健康を気遣うことを学び、経験することで自分や家族の健康状態の向上にも関心をもち、主体的な取り組みに加え、障害のある人や高齢者などの支援活動につなげることができる。

対面販売の店舗

障害のある人たちと買物しやすい店であること、退職世代の人たちが地元で顔みしりを増やすことなどを考慮。

交流に資するメニュー

みんなでわいわいがやがや話しながら食べることで、会話を促進し仲間意識を高める。
一緒に鍋を食べると取っつけたり取ってもらったり、普段おとなしいあの人や季節の素材を生かした料理も話題提供には格好。

プログラム案
10

食料自給率39%だって知っていましたか？

有機野菜を育て 未来ある子どもたちに
安心・安全な食育をプレゼント

有機農法を身につけ、よく肥えた土をつくり愛情をもって野菜を育てる。自然と共生する農業を楽しみ、安心・安全な食生活を自分だけのものから、夫婦で、仲間と広げ、未来ある子どもたちのためにも“お裾分け”をする活動に導くプログラムとすることにより、「地域での子育て」にもかかわったり、将来的には障害のある人の支援などを含めた有機野菜レストランなどの運営にもつなげられる可能性がある。

食料自給率 39%
食料自給率は、国内で消費される食料全体に占める国産品の割合、つまり食料の自給度合いを示す指標である。日本の自給率はいわゆる先進国のなかで格段に低い。このことを知ってもらうことで、次世代の子どもたちへ安心・安全な食をつないでいく必要性を感じ、自分にできることを考えてもらう。

有機野菜
種まきまたは植付け前2年以上の間、化学的に合成された肥料及び農薬を避けることを基本として、堆肥等による土づくりを行った畑や田んぼで生産された農作物で、国が認めた登録認定機関によって有機 JAS 認定を取得した物をいう。たい肥の原料は、鶏糞、落ち葉など自然界に存在するものを利用して肥料をつくることから始める。最初から完全有機が困難であれば、低農薬農法など、安全に留意しつつも無理のない方法で始める。

有機野菜レストラン
退職世代の社会的起業として、障害のある人たちの雇用なども視野にいれ、仲間と育てた野菜で地域の人や観光客もよびこめるようなレストランをつくる構想

プログラムの目的	有機農法を学び、美味しく安心・安全な野菜づくりや食の大切さを自ら子どもたちに伝えていくとともに、地域での食にかかわる理解推進の担い手となってもらう。
プログラム計画の経緯・背景・前提	退職世代が退職後にやりたいことの1つに 有機野菜 づくりがあげられる。 食料自給率39% という日本の危機的状況は、あまり知られていない。退職世代がグループで有機農法を学び、美味しく安心・安全な野菜を育ててくれたら、日本も少しは救われるかもしれない。また、栄養士やヘルスマイト等と連携を図りながら子どもへの「食育」に協力することで、自ずと地域の一人としてつながりがもてる。
運営主体	社会福祉協議会、JA等によるプロジェクトチーム
運営・実施組織の構成メンバー	社会福祉協議会、 JA（農業協同組合） 、県農業改良普及所、行政、栄養士、教育委員会、農家、児童館、農業高校
参加者・対象者	退職世代（と、その妻）、子どもたち（保・幼・小・中・高）
具体的な事業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 農業協同組合等との事業交渉（農地賃貸、指導者の紹介等） 2. 運営実施組織メンバーとプログラムづくり 3. プログラム実施 <ul style="list-style-type: none"> 1年目（夫婦で参加を推奨） <ul style="list-style-type: none"> * 日本の農業の現状を知る。 * 土づくり、野菜づくり・果実づくりの基本を学ぶ（座学） * 実践編 土・野菜・果実など育ててみよう * 自分で作った産物を使って、料理教室を開催 2年目 <ul style="list-style-type: none"> * 子どもたちと一緒に野菜づくり * 収穫した野菜で食育を 3年目（展開予想） <ul style="list-style-type: none"> * 地元の学校・施設で地産地消をすすめる（子どもたちに食の安心・安全を） * 有機野菜レストランの経営（夢をかたちに／障害者雇用も計画に入れて）

協働相手・サポーター リクルートする相手 必要な資源 など	地元農業協同組合、栄養士、ヘルスマイト、有機野菜づくり名人、大学生、障害者グループ、教育委員会、保育所、幼稚園、小・中学校、高校、児童館など 休耕地など、野菜づくりができる農地（無償あるいは低価格での貸与など）
中間支援組織に 期待されること・役割 など	農業協同組合のモデル事業として協力が得られるよう、社協が調整機能を果たすことが望ましい。賃貸農地、農業指導、食育の協力、市町村内の学校への野菜納入による地産地消、退職世代メンバーの共同経営による有機野菜のレストラン（障害者雇用の可能性）、など事業展開時のファシリテーターとして、関係機関への根まわし、資金調達のための情報提供や仲介実施に必要な場や道具・人材確保のための情報提供や仲介、実施中のリスクマネジメントなど。
事業推進の 留意点	農業は、自然が相手であるため、大きな賭けを強いられる。また、初歩からの学びとなるため、指導者の確保が必須である。当初から、無理のないプログラム展開を心がけるとともに、失敗や困難をポジティブな方向に転換する仕掛けを考える。 プログラムの鍵のひとつは、共通の目標に向かう新しい仲間づくりをいかに支援できるか、にある。ともに額に汗して働き、さまざまな困難に協力して立ちむかうなかから絆を深め、地域社会の一員としての自覚を高められるようにしたい。 妻の協力も必須であり、妻を巻きこむ仕掛けをうまくつくりたい。
この事業の「うり」 期待される効果	自然の中で、スローライフを味わうには一番のいやし系メニューが農業である。土づくりから始まり、日々大きく成長する野菜たちに一喜一憂しながら大切なものを愛情をもって育てる感覚を味わい、自然に生かされていることに感謝し、そのこと伝えていくことを、今、始める時が来ている。それができるのが退職世代である。

地産地消
「地域生産地域消費」の略語で、地域で生産された農産物や水産物をその地域で消費することをいう。エコロジーの観点、地域経済の振興といった点から近年あらためて着目されている。

JA 農業協同組合
JA（農協）は、人びとが連帯し、助け合う「相互扶助」の精神のもとに、組合員農家の農業経営と生活を守り、よりよい地域社会を築くことを目的としてつくられた協同組合。組合員の農業経営・技術指導や生活についてのアドバイスを行うほか、さまざまな事業や活動を行っている。最近では、高齢者福祉活動や学童農園への支援、ファーマーズマーケットなど地域社会とのつながりを強める活動に取り組んでいる。



コラボカフェで地元になつ!

地域のさまざまな人たちが、老いも若きも自由に入出入りでき、集まることができ、語り合ったり、ときには、教えあったり、助け合ったりする場を提供。さまざまなメニューが用意されることにより、多様な人が、多様な形でかかわることができる。なかでも退職世代は、その中核となる運営・マネジメントに力を発揮することができる。その場をつくっていくなかから、地域の人びと、地域の動きを知り、その経験から、地域の人びとが互いに知り合い、支えあう地域の機運を盛り上げ、人びとの和をもって暮らしやすいまちづくりを行っていくことが期待される。本報告書で提案されたいろいろなプログラムをつないで、大きなひとつのまちづくりプロジェクトとしてイメージしたもの。

拠点

そこに行けば 誰かいる 何かやっている 情報が得られる という場にする。できるかぎりアットホームで気軽な雰囲気をかもしだせるよう留意。出入口やトイレなどはバリアフリーの配慮も。固定的なプログラムと流動的なプログラム（単発のイベント、定期的ではあるが頻度が少ない、内容が変わる、もちこみ企画 など）を組みあわせて関心が深まり広がること、また、いろいろな世代がかかわる工夫をする。

Example

たまり場の雰囲気は

- ・地元のおばちゃんたちのおかず交換会
- ・お茶やコーヒーは、退職世代の趣味人が、実費でしっかりたてる
- ・近隣のマダムのお茶の趣味のケーキやクッキー、あるいは福祉施設のパンやお菓子なども実費で
- ・バックには日替り・時間替りできるとき、往年のジャズやロック、フォーク、シャンソンなどが流れることも

退職世代の地元の人たち

「場」を日々開き、プログラム運営の中心となり、参加者であると同時に役割を担う人にもなってもらおう。プログラムを通して、地域を知り、地域の人々の顔みしりをたくさんつくるとともに、自らが寄与できることを知り、さらなる地域での活動に関心をもってもらう。

プログラムの目的	たまり場を拠点に、地域の人びとの交流の場を提供し、退職世代が運営の中核を担う、地域の支えあいのネットワークをつむぎ、より暮らしやすいまちづくりに貢献する
プログラム計画の経緯・背景・前提	まちのなかで、人びとが出会い、集い、語り合うことのできる場が少なくなり、人びとのつながりがますます希薄となっている。特に退職世代がゆったりくつろげたり、井戸端会議ができる空間がなくなっている。 まずは場の提供から、交流のきっかけをつくる必要がある、との認識からつながりづくりを意識した多様な人びとが気軽にかかわることができるプログラムを仕掛ける。
運営主体	コラボカフェ実行委員会
運営・実施組織の構成メンバー	社協／社協VC、商店会、JC、民生委員・児童委員、福祉施設、大学生、障害のある人、退職世代ボランティア市民活動グループ、保育士OB
参加者・対象者	利用対象者：地域の人すべて（お年寄り、子育て中のおかあさんと子ども、福祉施設の利用者、在宅の障害のある人、子ども、青少年、教員、商店の人、大学生、退職世代など） 中核になる参加者： 退職世代の地元の人たち
具体的な事業内容	空き店舗or 空き古民家or 空き大きな農家などを改装して拠点とする I 拠点で実施すること（サンプル）： 1. たまり場 → プロジェクトのベースとして人と人をつなぐ場。地元の人たちが自由に入出入りでき、お茶やコーヒーもオーダーでき、おしゃべりしたり、趣味グループで作業したり、物々交換したりできるスペース 時には、ギャラリーとして、写真展、美術展、カリギュラフィー展なども、壁などを使って実施。 2. ミニテンプナーサリー 3. アートセンター 4. 園芸野菜 づくり

具体的な事業内容（続き）	II 実行委員会として実施すること イベントや講座の企画 → 退職前後世代の関心をひきそうなプログラムメニューをそろえつつ、多世代が参加できる仕掛けのある展開をつくる。たまり場で実施の場合もあれば、他の場所で実施することも。連続教室の場合も、単発イベントの場合も。
協働相手・サポーター リクルートする相手 必要な資源 など	商店会加盟店舗、まちづくり系NPO、食品衛生管理者、古物商、管理栄養士、火元責任者の資格をもつ人、大工や修理技術のある人、趣味人（鉄道ジオラマ、コーヒー、ケーキ等、料理等、手芸等、ギター等）、アーティスト、学生、保育士、司書、古武術家、農家など
中間支援組織に期待されること・役割 など	プログラムコンセプトの立案（実行委員会にかける前の） プログラム実現に必要なキーパーソンを選定 実行委員会の組織化と実行委員会のファシリテーション 行政や商工会議所など、関係機関などのねまわし 基礎資金の調達 事業実施に必要な免許、資格、法的手続き、権利関係について明らかにするとともに、必要な人材の手配や手続きに協力する 実行委員会化後の継続的支援（フォロー、コンサル、トラブル・シューティング、情報提供、PR、組織マネジメント、アドバイス、リスクマネジメントなど）
事業推進の留意点	最初から欲張り過ぎない。 専門家によく相談し、法的なバックアップ、安全の確保をまちや商店会のキーパーソンをはずさない。 地産・地消、エコロジーに留意した資源（人もものも）を活用する。
この事業の「うり」 期待される効果	住民主体の実行委員会による自由闊達な企画・運営。 孤立している人たちでも入りやすい場の提供により、地域の顔見知りを増やし、支えあいのネットワークを広げる。 メニューを豊富にするので、いろいろな人が参加しやすい。 場を基点にまちづくり全体を考えられる。

ミニテンプナーサリー

おかあさんが役所にいったり、病院にいったり、買い物したり、ちょっと息抜きしたりすることができるよう、当日随時受付、時間も自由に子どもを預けていくことができるスペース。リタイアした保育士常駐。地元のおじさん・おばさんも世話役に。

アートセンター

月に数回、子どももお年寄りも若者も障害のある人もみんな、好きにアート作品づくりにいそいそと活動できる空間を提供。地元のアーティストの協力を得て、美大生などが世話役に。

園芸野菜

地元で独特な野菜を、地元の高齢農業者の指導で栽培料理の伝承・開発プログラムにもリンク。大学生が仕掛けるお年寄りとお食会など、育てた野菜の活用プログラムで交流促進。

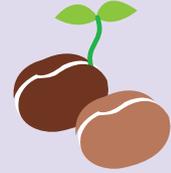
Example

連続講座などの例

地域の防災・減災実践教室
まちの観光大使養成講座
郷土料理を伝承し、地域の食文化を再興する会
映画館では見られない映画を上映する会
絵本読み聞かせ会
鉄道模型のジオラマで模型を走らせる会
ブルースギター教室
ホノルルマラソンをめざそう会
身体のつかい方教室
コミュニティ・ガーデンをつくらう会
デイ・ホスピスを考える会
など

V

参 考



団塊の世代を理解するキーワード

昭和31年	1956年	国連加盟 水俣病 「もはや戦後ではない」 公団住宅入居開始
	1957年	ロカビリーブーム 昭和基地完成
	1958年	ウエスタンカーニバル 東京タワー完成 チキンラーメン発売
	1959年	皇太子御成婚 伊勢湾台風 少年マガジン/少年サンデー創刊
	1960年	日米安保条約改定 インスタント時代 ダッコちゃん テレビのカラー本放送開始
	1961年	若大将ブーム ワンマンバス 「地球は青かった」
	1962年	YS-11 青田買い
	1963年	スーパーマーケット ボウリングブーム ケネディ大統領暗殺
	1964年	東海道新幹線開通 東京オリンピック VAN/JUN 平凡パンチ創刊
	1965年	アイビー族 ベトナム戦争北爆開始
昭和41年	1966年	ビートルズ来日 カレッジ・フォークブーム
	1967年	アングラブーム ミニスカート流行 グループ・サウンズブーム
	1968年	全共闘 三億円事件 霞ヶ関ビル完成
	1969年	東大安田講堂の攻防 フォークゲリラ 「断絶の時代」
	1970年	大阪万国博覧会 あしたのジョー連載開始 an an創刊 カップヌードル発売
	1971年	non-no創刊 多摩ニュータウン 「ガンバラナクツチャ」
	1972年	日本列島改造論 沖縄返還 あさま山荘事件 ワーカホリック
	1973年	オイルショック コインロッカーベビー 金大中事件 ぴあ創刊
	1974年	小野田少尉発見・帰国 長島茂雄引退 かもめのジョナサン
	1975年	キティちゃん登場 100円ライター登場 第1回先進国首脳会議
昭和51年	1976年	団塊の世代 「限りなく〇〇に近い△△」 ロッキード事件 POPEYE創刊 宅急便登場
	1977年	「僕って何」 ルーツ流行 有珠山噴火
	1978年	成田空港開港 ディスコブーム 窓際族 キャンディーズ解散
	1979年	インベーダーゲーム流行 東京サミット ウォークマン発売
	1980年	「みんなで渡れば怖くない…」 山口百恵引退 レンタルレコード店登場 竹の子族
	1981年	クリスタル族 focus創刊 窓際のトットちゃん
	1982年	コンパクトディスクプレイヤー発売 ホテルニュージャパニア火災 500円硬貨発売
	1983年	軽薄短小 戸塚ヨットスクール事件 東京ディズニーランドオープン
	1984年	グリコ・森永事件 かい人21面相 エリマキトカゲ
	1985年	科学万博「つくば 85」 日航ジャンボ機御巣鷹山に墜落
昭和61年	1986年	地上げ バブル チェルノブイリ原発事故 「究極の…」
	1987年	国鉄民営分割化 サラダ記念日 「懲りない…」
	1988年	消費税 青函トンネル開通 瀬戸大橋開通 リクルート事件
	1989年	天皇崩御 「平成」のはじまり ベルリンの壁崩壊 「24時間たたかえますか」

* 団塊の世代がものごころついた頃から中堅として活躍するようになる頃までの昭和の時代の事象や流行語などを集めてみたものです。

「定年退職者の地域活動の開発・支援のあり方に関する調査研究事業」について

1. 趣旨

今後、いわゆる団塊の世代を中心に新たに定年退職者が集中的に地域に戻ってくる。地域社会においてなんらかの活動やプログラムに参加したいと考える人も少なくないが、実際にはなかなか活動に結びつかない現状にある。

このような定年退職者に対して、ボランティア活動支援組織はどのような支援をすることができるか、どのようなプログラム提案ができるかを考えていくことが必要となっている。

本事業では、団塊世代を含むシニア世代がかかわる地域活動などについて、これまで行われてきた活動の事例ヒアリング、分析・評価・比較検討をとおしてその特長や成功の秘訣、継続のこつなど明らかにする。そのうえで、今後、地域活動に参加したい、あるいは自らが活動を組織したいと考える新規退職者に、支援組織としてどのような仕掛けをつくり、どのようなプログラム開発を行っていくのかを検討する。

2. 調査研究の手順

- プログラムおよび展開方法に関する事例収集
- 分析・評価・比較検討
- 取り組み提案（プログラム開発）

3. 成果の発表方法

- 報告書の作成・配布

4. 研究委員会委員

蛭江紀雄（広島文教女子大学）★委員長

鳴海孝彦（青森県社会福祉協議会）

佐和良佳（美馬市社会福祉協議会）*

長谷部治（神戸市長田区社会福祉協議会）*

五十嵐美奈（興望館）*

日塔憲夫（茅ヶ崎市商店会連合会）

米澤智秀（高雲寺）*

（順不同・敬称略）

* は作業委員も兼ねる

（平成19年度老人保健事業推進費等補助金事業）

退職世代が地域を変える
定年退職者の地域活動の開発・支援のあり方に関する調査研究事業報告書

平成20年3月

社会福祉法人 全国社会福祉協議会
全国ボランティア活動振興センター

〒100-8980 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル
電話 03-3581-4656 FAX 03-3581-7858

本事業は平成19年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）により行ったものです。

Back to the Community

